



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4

始



特217
761



歎

脇
谷

異

搗

鈔

謙

講

著

話



歎異鈔講話目次

第一章

本文……真宗と信仰……一章の梗概……一章の要目

一 信仰とは何ぞや

信仰とは何ぞや……誤れる二考察……撞木と鐘

二 罪惡の吾等

罪惡の吾等……自己反省……道綽禪師の聖語……眞實の自己……罪惡の衆生といふ意義

三 平等の信仰

平等の信仰……西田天香氏の話……法然上人の法悦……本願を發起せられたる所以……重罪犯人の告白

第二章

目次

一 何をか求むる……………一章の要目……………三九
 何をか求むる……………善財童子の求道……………關東同朋の求道

二 よき人の仰せ……………
 よき人の仰せ……………よき人……………長者窮子の喩……………善財童子及び窮子と關東の同朋達……………四八

三 聞くが即ち信ずるなり……………
 超世の大願とその成就……………御名を御聲にて聞かしめんさのお誓……………御名に救はれし觀經下々品の惡人……………六字の意義……………釋尊の説法……………説者と聽者……………六二

第三章……………
 本文……………一章の梗概……………一章の要目……………六六

一 善法と惡法……………
 善人と惡人の區別はない……………凡夫の往生……………凡夫の往生を疑ふ考の根據……………批評し教ふる態度について……………八一

二 自力と他力……………九一

三 惡人と他力……………
 二種深信……………惡人往生の實歴……………極重惡人の意味……………一〇六

第四章……………
 本文……………一章の梗概……………佛教に於ける慈悲の意義……………慈悲とは如何なる心か……………
 智慧……………慈悲……………方便……………聖道門の慈悲行……………眞實の慈悲……………一章の要目……………一一〇

一 聖道と淨土……………
 聖淨二門判の起源……………自力聖道の意義……………往生淨土の意義……………一二八

二 自力に慈悲なし……………
 自力に慈悲なし……………慈悲の狹義としての同情……………一三四

三 一貫せる慈悲……………
 淨土の慈悲……………法悦の生活……………常行大慈と知恩報德……………救済の自覺を急務とす……………攝取不捨と正定聚と不退轉……………平生業成と現生不退……………體失往生と不體失往生……………一三九

……慈徳行を來世に期せらるゝ所以

第五章

……一五三

本文……父母孝養の意義……父母とは何ぞや……念佛とは何ぞや……一章の要目

一 孝養の對象

……一六〇

孝養の對象……忠と孝と……岳飛の話……小青の話

二 念佛の太行

……一七一

念佛は我力にて勵む善ならず……念佛する原動力……他力催足の太行……一青年の告白……報恩の行……他宗の念佛と眞宗の念佛

三 眞の孝養

……一八三

父母とは生父母母にかざるにあらず……一信仰家の告白……眞實の孝養

第六章

……一八九

本文……一章の梗概……蓮如上人の訓諭……新堤の信樂坊

一 弟子とは何ぞや

……一九六

教育の意義と時代の推移……誤れる教育……自然の常道……御同朋御同行主義……同朋愛の徹底

二 因縁の諸相

……二〇〇

因縁の相狀……信訪順逆の事縁……性信房へ……眞淨房へ

三 眞の師弟

……二一九

自然法爾……自然の理にかなへる者の態度……弟子と師匠

第七章

……二二七

本文……吾が行く道……一章の要目

一 無礙の一道

……二二八

二河白道の譬喩……譬喩の所詮……父歸る……六賊常に我に在り……貪瞋二河は即ち自己……道を眺めて遲疑す……親に先立つ子は知識……聲を聞きて道を進む

二 外難やがて外護

……二四一

信者に敵なし……箱根の感應……熊野參籠……修驗者歸仰……信訪共に勝縁

三 善惡共に味道の勝縁

……二四九

信前と信後……如來の願力……信後の嗜み……………二五五

第八章……………二五五
本文……四不十四非……聖道門と要門と眞門……如來のはからひ……一章の要目……………二六〇

一 信心の行者……………二六〇
念佛が即ち信心なり……行者が如來の所有となる……念佛は如來の行……………二六二

二 行者のはからひ……………二六二
行者のはからひは妄念なり……二種の空觀……………二六五

三 如來のはからひ……………二六五
如來のはからひは他力なり……無生の三喻……名號の徳と淨土の徳……………二七〇

第九章……………二七〇
本文……一章の梗概……………二七五

一 同信同耻……………二七五
正定と必定と不退轉……眞佛弟子と便同彌勒……同信同耻……………二七八

二 矜哀の大悲……………二八一
阿闍世王の懺悔……矜哀の大悲……………二八二

三 感激の法悦……………二八八
煩惱の所爲……苦惱の舊屋……………二九一

第十章……………二九一
本文……一章の梗概……………二九四

一 義なきを義とす……………二九四
性信房へ……慶西房へ……兼信房へ……………二九八

二 攝取不捨……………二九八
教名房へ……淨信房へ……眞佛房へ……攝取不捨が如來のはからひ……………三〇一

三 自然法爾……………三〇一
如來のはからひを自然法爾といふ……願力自然と無爲自然……………三〇六

本文……誓願名號同一事……一章の要目

一 如來の本願……………三三

 念佛往生の本願……三信と念佛

二 誓願と名號……………三六

 因願と果力……南無阿彌陀佛の大道……名號即ち本願

三 信心と稱名……………三九

 他力の信心と他力の稱名……信じて稱ふれば必ず往生す

第十二章……………三二

一 學問は何の爲めか……………三二

 學問は疑ひを解く爲めなり……往生の爲に學問の要なし

二 學問は必要なり……………三〇

 學問は自利利他の爲めなり……諍はんが爲の學問は自損損他……熊澤蔭山の識見

三 信謗は因縁なり……………三七

諍ふは我れより敵を設くるなり

第十三章……………三四〇

- 一 本願にほこるな……………三四八
- 我が心のまゝなるが本願ばかり……造罪と宿業
- 二 本願にほこれ……………三五一
- 煩惱を断じなば即ち佛なり……本願を誇りさせよ
- 三 本願と宿業……………三五五
- 生得の善惡は過去の因……往生の大益は如來の他力

第十四章……………三九七

- 一 滅罪は佛力なり……………三六一
- 觀經下三品の佛說
- 二 自力滅罪は不可能なり……………三六四
- 罪きえざれば往生はかなふべからざるか……罪まゝを救ふたまふ本願

三 念佛は報恩なり……………三六七

必墮無間と必得往生……………滅罪は信するにおよばず……………他力催促の念佛

第十五章

一 信心と成佛……………三七四

ながく生死をへだつ……………如来さひさしといふこと……………性信房へ……………眞佛房へ……………
淨信房へ……………かされて眞佛房へ……………慶信房へ……………

二 此の世と彼の土……………三八二

眞言祕教と法華一乘

三 即身成佛は不可能なり……………三八五

天台大師と智覺禪師……………白樂天の詩

第十六章

一 懺悔滅罪……………三九二

懺悔の字義……………三品の懺悔……………懺悔は三賢位の聖者の事……………眞心徹到即ち懺悔

二 廻心懺悔……………三九五

三 懺悔滅罪は不可能なり……………三九九

彌陀にはからばれまいらする……………願力自然の催しが眞の懺悔

第十七章

本文……………化土往生の事……………四〇三

一 彌陀如来の本願……………四〇六

化土往生も如来の願力……………果遂の誓約

二 釋尊の開示……………四〇九

化命の誓願良に由ある哉……………疑心の善人……………悪人の疑惑

三 角を矯めて牛を殺す……………四二二

自力策勵の佛意

第十八章

本文……………念佛の多少と施物の多少……………四二四

一 物資に對する用心……………四二八

物を大切にする心と物に執着する心

二 施物だのみ……………四二〇
施物を中心の坊主と門徒

三 法施と財施……………三二六
法中に衣食あり……生活の淨化

總結の文……………

一 信仰の異同……………四一九
本文……異義の根源

二 信仰の統一……………四三四
本文……歎異鈔編述の趣意……歎異鈔の著者

三 眞實の信仰……………四三八
我身を信知し願力を仰信す……是さし非とするの理、誰れか能く定むべき

四 歎異鈔……………四四四
本文……たゞ親鸞聖人の仰せのまゝを記す

歎異鈔講話

脇谷 攝謙 著

第一章

一 彌陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

彌陀の本願には、老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を以

とすとしるべし、そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。

しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要にあらす、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと云云。

眞宗と信仰

自分はこれから教異鈔によりて、親鸞聖人の信仰を咀嚼したいと思ふ。蓮如上人の詞に「祖師聖人御相傳一流の肝要は、たゞこの信心ひとつにかぎれり」といひ、「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもて本とせられ候」とある。尤も「信は道の元、功德の母」とも説かれ、「佛法の大海には信を以て能入とす」

一章の梗概

ともありて、信仰を肝要としない佛法は無い。豈に當に佛法とのみいはんや、苟くも宗教を標榜とするものに、信仰を説かないものは無い。けれども、信仰を唯一絶對とし、一念信仰の端的に、三世十方の全問題を解決すと爲し、涅槃眞因唯以信心と極唱せらるゝは、獨り親鸞聖人のみである。

信仰とは、何を、如何に、信するのであるか、謂く、彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばどぐるなりと信するのである。彌陀の誓願は、誰れをたすけたまふのであるか、謂く、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。しからは彌陀の誓願は、たゞ罪惡深重煩惱熾盛の衆生のみをたすけたまふのであるか、謂く、本願を信せんには、他の善も要にあらす、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさ

またぐるほどの悪なきが故に、老少善悪のひとをえらばれず、平等にたすけたまふのである。かくの如く、彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち一念信仰の端的に、攝取不捨の利益にあづけしめたまひ、吾等が三世十方の全問題を解決せしめたまふのである。

以上が第一章の梗概であるが、尙ほ(一)信仰とは何ぞや、(二)罪惡の吾等、(三)平等の信仰の三段に分ちて、この章の意味を咀嚼したいと思ふのである。

一、信仰とは何ぞや

信仰とは、自分が如來にたすけらるゝと信することである。自分と如來を引

一章の要目

信仰とは何ぞや

誤れる二考察

き離して、そこに信仰はあり得ない。然るに、世間往々にして、二者没交渉に、信仰を語るの聲を聞くことがある。一には謂く自我の尊嚴、人生須く自立を要す、何ぞ他に依りて安住を求むるの痴態を學ばんや、自我に生き、己れの道を行くべきである、自分はかくの如き信仰を持つて居ると。吾人よりこれを見れば、かくの如きは獨自一個の考案であり、思想であつて、時々刻々轉々變化し、何等定住するところもなければ、安立するところも無い、何ぞ稱して信仰といふことが出来やうか。更に他の一方には、たゞ如來を説明し、如來を憧憬するのみにて、本願はかくく、慈悲はしかくく、たゞそのみを心得、以て信仰を得たりと落ち着いて居るものも少なくない。かくの如きは、たゞ如來の誓願といひ、大慈悲といふことを説明するばかりであつて、その本願、その

大慈悲に誰れがたすけらるゝのであるかといふ自覺がない、ごうして信仰といふことが出来やうか。これを要するに、前者は如來を忘れ、後者は自分を忘れ、自分と如來と没交渉である、そこに信仰のあられやう筈がない。信仰とは、自分か如來にたすけらるゝと信することではなければならぬ。

撞木を以て鐘を打てば、ゴーンといふ音響を發して、餘音嫋々、心耳に微妙の感興を催さしむるが、撞木のみ此の音響はなく、又鐘のみにもこの餘音は無い。自我に生きるといふ人は、撞木のみ音響を論じ、如來の本願のみを説いて自覺を缺きたる人は、鐘のみに餘音を求むるもので、何れも誤れる人々である。そこで「鐘が鳴つたか、撞木が鳴つたか、鐘と撞木が合へば鳴る」とか申すことであるが、これも尙ほ未だしであると思ふ。試みに鐘と撞木とを静か

撞木と鐘の譬

にくく合せて見る、決してそこに音響も發せねば、餘音も起らない。世には又かくの如く、冷やかに如來に向ひ、靜かに如來に對して、吾れこそ信仰を得たりと誤認して居る人も少なくない。かくの如きを稱して、信仰といふべからざるは、前二者と異なるどころないのである。

一たび鐘と撞木と打つ着ければ、こゝに一大音響をたて、餘音はながく嫋々として、普く天空に漲り互る。而して此の音響、是の餘音には、鐘と撞木の區別を泯亡し、鐘と撞木とが全く一體になつて居る。自分の三世十方に互れる、全心、全身の、全問題を提供して、一たび如來の誓願不思議に打つつかれば、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまひ、機法一體、佛凡不二、如來と自分と、二にして一の妙境界に安住する、こゝを稱して信仰といふのである。彌

陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばどぐるなりと信ずるは、打つつかつて發したる一大音響である、念佛まうすは媚々たる餘音である。蓋しこれ冷暖自知の妙境、自ら打つつかつて一念發起すべく、容易く説明し能ふ問題ではないのである。

二、罪惡の吾等

如何なる者が、彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらるのであらうか、謂く「彌陀の本願には、老少善惡のひとをえらばれず、たい信心を要とすとしるべし、そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。」罪惡深重煩惱熾盛の衆生とは果して誰れであらうか、信仰は自己の問題で

罪惡の吾等

自己反省

あり、自己の内心の自覺である、深く自ら猛省するところが無くではならぬ。自分は果して如何なる者か、自分に何程の能力があるかと、如實に考へて見ねばならぬが、それには、自分は果して何が出来てあらうかと、將來について考ふるよりも、自分は果して何をして来たであらうか、何か出来た事があるであらうかと、今日唯今まで、經て来た過去の事實を顧るが、最も適切であると思ふ。將來を豫想して、自分の能力を考ふると、必ずそこに自負心がつきまどひ、全く空想に等しき理想を畫き、空中に樓閣を構へて憧憬し、決して自己の眞價を自覺することは出来ない。然るに、經て来た過去の事實を顧ればそれが己に自ら従事したる實跡であるから、自己の眞相が如實に現前して、眞實に自らを知ることが出来る、これ即ち反省であり猛省である。省はかへりみ

るといふこと、將來をかへりみるといふことのあるべきでない。随つて將來を豫想するのみの人に現實の自己を知ることの出来る筈がない。現在の自己は、過去の自己の總和であり、合計である。されば今日唯今まで、自分の經て來た過去の事實を、如實に反省することが、正しく現實の自己を知る唯一の道であることは、いふまでも無いことであるが、人多くはこれを忘れて居る、無反省の人は、即ち無自覺の人なること、堅く肝に銘じて置かねばならないことである。

支那唐朝の道綽禪師は、觀無量壽經に於ける九品の佛説を體驗して、眞實の自覺に達せられた人である。九品は要するに上中下の三品で、その上品は大乗の人、中品は小乗及び人天乗の人で、下品は罪惡の凡夫人である。禪師以爲ら

く、吾れ果して上品大乗の人と伍することが出来るであらうか、謂く否、若し大乘に據らば、眞如實相第一義空、曾て未だ心を措かず。眞如實相第一義空とは、生佛一如、迷悟一諦と主張する、大乘至極の教へであるが、かゝる幽玄なる第一義は、未だ曾て心に思ひ浮べたことさへ無しといはるのである。然らば小乗の修行はどうか、謂く、若し小乗を論ずれば、見諦修道に修入し、乃至那含羅漢、五下を斷じ、五上を除く、道俗を問ふことなく、未だ其の分あらずと。一口に小乗といふけれども、見道より修道に進み、五下五上の煩惱を斷じて、阿那含阿羅漢の證りを開かんこと、おぼろげの修行で出来ることでない、道俗を問はず、誰れか實踐の途に就いたことがあるか、到底吾等の分限でないといはるのである。然らば人天の果報は如何に、謂く、縱ひ人天

の果報あるも、皆五戒十善を爲して此の報を招く、然るに持得するのは甚だ稀なりと。人天の果報とは、人間と天上界のこと、五戒をたもてば人間の果報を得、十善戒をたもてば天上界に生るゝといふことである。前の大乗小乗にくらぶれば、これは三界有漏の善であるけれども、これさへ如説にたもち得るものは甚だ稀で、とても自分の分限ではないといはるゝのである。あはれ大乘の眞如實相といふ如き第一義諦は、未だ曾て心に思ひ浮べたことさへなく、小乗の修行といふも、曾て實踐の企てを起したことがない。更に五戒十善の人天のことさへ、終に己れの分限でないならば、自分は果して何をして來たであらうか。今はた何を爲しつゝあるであらうか、謂く、若し起惡造罪を論ずれば、何ぞ暴風駛雨に異ならん、是を以て諸佛大慈、勸めて淨土に歸せしめたまふ、縦ひ一

形惡を造るとも、但能く意を繋けて專精に常に能く念佛すれば、一切の諸障自然に消除して、定んで往生を得ん、何ぞ思量せず、都て去く心なきやと。道綽禪師はかくの如く、佛説に對して自己を猛省し、眞實の自覺に達せられた。自分の能力は恰も暴風駛雨の如く起惡造罪するより外、何事も爲し得ない、是を以て如來の誓願には、一生造惡の者をたすけたまはんと誓はせられた。若しも此の大悲大願に對して、遲疑逡巡するものがあるならば、思はざるの甚しきものであるといはるゝのである。

大乘といひ、小乗といひ、更に天上界の果報といつても、何だか自分等とは沒交渉な遠い他國の噂をして居るやうで、所謂實際に觸れた感じの起らないものであるが、人間といへば決して餘所事でない、問題は常に此所まで肉迫して

眞實の自
己

來ねば、眞劔にならないものである。その人間の果報は、五戒をたもちて得らるゝものだといはれてあるが、此所にその五戒の箇條をならべて穿鑿するの要はない、所謂正義人道を踐み行ふことだど心得ればよい。人誰れか、吾れは人間に非ずと思つて居るものがあらう、萬物の靈長として、思想を有し、理想を立て、向上の道をたどり、文明を完全せんことに努力して居るとは、一般の誇持し自負して居るところである。人あり、職を求めて履歴を徴せられたりとする、必ずや、自分ながらも齒の浮くやうな、冷汗が出るやうな、虚構の見えすいた美事善行を麗々しく、永々と三枚も五枚も書き列ねて提出することであらう、これでは心ある人から、冷笑か噴飯か、若しくは嫌惡の情を買ふばかりで、求むるところの得られやう筈がない。何故であらうか、そこに聊かも眞實の自己

が現はれて居ないからである。多くの人の、誇持し自負して居ることは、右の履歴書の如きものばかりであることを、誰れか否定することが出来やう。若し夫れ自己内面の實生活、内心の實歴を書き現はしたならば、果して如何なる履歴の人が現はるゝであらう。上品の大乗か、あらず。中品の小乗及び人天か、あらず。即ち籍を人間にかくることすら出来ないのである。然らば自分は果して如何なるものか、若し起惡造罪を論ずれば、何ぞ暴風駛雨に異ならん。眞實の自己を猛省して、此の自覺に達せざる人はあられないのである。

されば、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にたまはりますとは、別に智慧深重精進熾盛といふやうな人々があつて、それを簡びて、特に罪惡深重煩惱熾盛の衆生のみをたすけたまふといふのではない、凡ての人々が悉く

皆罪惡深重煩惱熾盛の衆生である。それゆゑに、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけたまふといふことが、やがてそのまゝ、老少善惡のひとをゑらびたまはざる、平等の本願であるのである。

三、平等の信仰

罪惡深重煩惱熾盛の衆生を、たすけたまはんがための本願が、やがてそのまゝ、老少善惡のひとをゑらばれざる、平等の本願である。それゆゑに、「本願を信せんには、他の善も要にあらす、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからす、彌陀の本願をさまたぐほどの惡なきがゆへに」といふ、絶對平等の信仰が確立するのである。

平等の信仰

西田天香
氏の話

西田天香氏が、新生涯に入られた當時のことを、自ら次のやうに記して居らるゝ。

私の新生涯になつた當時のことである。長男がたしか十二か十三のとき私が家内の里の家で風呂に入つたら「僕も一緒にはいる」といふて長男が飛び込んできた。風呂のなかでの長男の話に

「お父さん。ラケットを一つ買つて下さい」

「ラケットとは何ですか」

「テニスをするラケットです」

「學校で先生がいるから買つてくるやうに仰言つたのか」

「買つてこいとは云はらんが、買つて持つてゆくと一緒にテニスをやつてい

やはる。それで僕もほしい。ラケットを買って持つてゐる生徒はかはいがられるから』

『お父さんは、もうさうしたものを買ふことの出来ぬ事になつたのです』
『なんで？』

ラケットの問題は全體の問題である、長男に對しての一句の返答は私の生涯を活かすか殺すかの問題ともなる。無心な長男は追求して止まぬ。この位のものが買うてもらへぬ様になつた理由を知らすには、新生涯はあまりに説明が大人すぎる。無理に叱つては私の魂が落着かぬ。暫らく黙つて祈つてゐた。長男の顔は曇つてきた。あゝ無理はない。無理はない。けれどもどうするわけにもゆかぬ。

『保さん、なかつにお聞きなさい、お父さんが今おもしろい話をきかす。あなたは澤山なおつれと少ないおつれとどちらがよいか』

『それは澤山のおつれがよい』

『学校の生徒のうちで、ラケットを持つてゐる子が多いか、また持たぬ子が多いか』

『もつてゐる子は、多くはない』

『みんなの持つてぬものを持つのがよいか、また持たぬ仲間にはいつて、みんなを慰める方がよいか』

『……………』

『買うてもらへぬ子も、あなたのすきなおつれでないか』

『……………』

『わかつたか。あんたの云ふことが無理ではない。けれどもお父さんのいふことも無理でないとおもふがどうか。もしお父さんの子なら、どうかそれをわかつておくれ』

長男はズボット浴槽につかつた。私は手拭で顔を撫で、やりました。くもりは顔から消えたやうだ。

『もうあがらうか』

『さうなさい』

自分はいひ知れぬ感激を以て、この記事を読んだことである。少数を友とするから、自分の心は先づはつきりと區別が出来て、それが終に敵味方となつて

現はるゝ。多数を友とすることに衷心が定まれば、自分の心先づ平等になつてすべての人が皆同朋同行となる。多数はすなはちラケットを持たない生徒である。

「若し夫れ造像起塔を以て本願となさば、則ち貧窮困乏の類、定めて往生の望みを絶たん、然るに富貴の者は少なく、貧賤の者は甚だ多し。若し智慧高才を以て本願となさば、愚鈍下智の者、定めて往生の望みを絶たん、然るに智慧の者は少なく、愚痴の者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願となさば、少聞少見の輩、定めて往生の望みを絶たん、然るに多聞の者は少なく、少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律を以て本願となさば、破戒無戒の人定めて往生の望みを絶たん、然るに持戒の者は少なく、破戒の者は甚だ多し。自餘の諸行これに準

本願を發起せられたる所以

じて知るべし。まさに知るべし、上の諸行等を以て本願となさば、往生を得る者は少なく、往生せざる者は多し。然れば彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普ねく一切を攝めんがために、造像起塔等の諸行を以て、往定の本願と爲したまはず、たゞ稱名念佛の一行を以て、其の本願と爲したまふ也。」とは、自ら愚痴の法然房、十惡の法然房と稱し、かゝる極惡最下の者の爲に起したまへる、極善最上の本願なりと感泣せられた、法然上人の法悦である。

凡そ人の世の中に、富者は少なく貧者は多い、智者は少なく愚者は多い、多聞の者は少なく少聞の者は多い、持戒の者は少なく破戒の者は多い。而して少數の者の爲にせず、多數の者の爲に發願修行せられたるは何故であらうか。そも彌陀如來法藏比丘の昔、師佛世自在王如來の御前にて、願はくば我をして、

諸の生死勤苦の本を抜かしめたまへと願はれた。時に師の如來の申さるゝやう、願ふところ汝自ら當に知るべしと。時に比丘白さく、斯の義弘深にして、我が境界に非ず。唯願はくば廣く説き聞かしめたまへ、我れ當に説の如く修行して、所願を成滿すべしと。かくて師の如來の説き示したまふまゝに、その心寂靜にして、志し着するところなく、功を積み、徳を累て成就せられたるが南無阿彌陀佛の念佛である。すなはち自ら無一物の多數に伍して、師佛の導きたまふまゝに發願修行せられた、身を以て導かれたのである。それゆゑに彌陀の願行が即ち吾等の願行である。これほど純なる願があらうか、これほど眞なる行があらうか、稱して清淨の願といひ、眞實の行といふ所以である。かゝる願行にて成就せられた南無阿彌陀佛に對し、自我執着の雜心雜行を提出するこ

どが果して出来ることであらうか、よしや臆面もなく提出したりとして、果して何の顔色があらう。抑も亦此の願力に對し、此の名號に向つて、自己の罪惡深重に怖れを懷き、遲疑し逡巡するの要があるであらうか。

畏れ多くも明治大帝は御身をかたつむりに寄せられて「さゝやかにみゆる家居もかたつむり、身をしのぐには事足りぬべし」と詠じさせられた、何といふ純真なる御心でましますことだらう。かくて又「あさみどりすみわたりたる大空の、ひろきをおのがこゝろともがな」と詠じさせられた、何といふ廣大なる御心にてましますことだらう。かゝる大御心に對する國民に、自己の善惡邪止をあげつらう心が起り得るであらうか。ランプだ瓦斯だ電氣だといつて、光りの如何を論ずるは暗夜のこと、これを日中に於てするは、兒戯にも及ばざる徒

重罪犯人の告白

事でないか。しかれば本願を信せんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと云々。再唱三唱、盡きせぬ法悦を覺えずには居られない。

天下の人心を戰慄せしめた重罪犯人は、教誨師なる吾等の同人藤井惠照兄が大正九年二月中旬頃、彼を訪れた時、かう告白したさうだ。

「ア、私は眞に惡う御座いました、この惡人を救ふ如來の恩寵は實に私の生命です。私は歎異鈔の第一章より外に何にも入りません、最早研究も致しません、たゞ南無阿彌陀佛を稱へて感謝して居ります。……絶對他力です、もう私は何にも彼も眞當に御他力と云ふ事に氣付かして貰ひました。自力といふものは少しもないと云ふ事に、此頃ツクツク氣付かして

いたゞきました。』

又彼れは同郷同學の友人が訪れた時、かういつたさうだ。

『阿部君、俺はまだ世の中に居た頃から、世間の冷たさを歎じて居た、人の情は薄いものだと思つて居た。併しそれは間違つて居た。世の中は矢張り美しいものだと、俺はしみじみ考へて居る。君たち友人の友情の美しさに俺は感謝して居るが、俺を知らぬ未知の人々が尋ねて来て、俺を慰めて呉れるのにも、俺は感謝せずには居れぬ。實際世の中は美しく輝いて居る。その表面は假へ冷やかな様に見えても、世間の底を流れて居るものは、涙を以て噛みしめたい様な、愛と美だといふことをつつく考へさせられた。考へても見たまへこんな不快な建物の中にある、俺の様な大罪人を尋ねて来て呉れる、

友人や未知の人々の心の熱いことを考へれば、俺は實際涙ぐみたくなる。何者かに向つて感謝せずには居れぬ。』

さうすると又阿部君といはれた友人は、次のやうに自分の衷心を告白したさうだ。

『山田君、君はまたそれを言ひ出すのか、さう君が自分の身を卑下した言葉を聞くのは、俺には何よりも切無いのだ。君は大罪を犯した事を恥て居るが、併し、それはもう忘れなくてはならぬ事だ。人は罰しても、神や佛は悔悟した者の罪は許すのだ、俺はさう信じて居る。而してこの世の中には、君一人が悪人といふ譯は無いのだ、俺達人間は皆な悪人なのだ。君は既に悔悟した立派な人間だ、されど俺達人間の多くは、自分の心の奥底に潜んで居る悪心

にさへ氣付かぬ人間なんだ。先日も君を尋ねて来た時、一寸教務室を訪れたら、其處に二三のものが来て居て、教誨師の藤井さんを困らして居たよ。彼等は君が大罪を犯したのは、遺傳か又は農科大學で牛や豚を殺したりした科擧の罪かなんていふ愚問を發して、藤井さんの返事を促して居たが、俺は其奴等の顔を穴の開く程見詰めてゐた、情なくなつて涙も出なかつたよ。ほんたうに、君を責める多くの人達が、自分自身の心を正直に見きはめる事が出来たら、君が陥つた不幸にも確かに同情出来るんだ、而して其處から尊い人生の何者かの片鱗を獲得する筈なんだ。併し彼等には夫れが出来ないんだ。そりや吾々には理性があるから、人の生命を取る様な事は出来んさ。併し、吾々人間の威張つてゐる理性がなんだ、何處までも當てになるものか。一朝吾々の

心が憎惡の念に燃えたり、或は其の他の事で、この理性が狂つて了はぬと云ふ保證の出来る人間が果してあるか、俺はそれを疑ふのだ。若し誤つて、君の陥つた不幸に吾々の遭遇したと假定する、其の時俺たち人間は、君の採つた様な手段、或はもつと、巧妙な手段で、自分の犯した罪を永久に人間の世から隠して仕舞ふとする氣が起らないと、誰が斷言出来る者か。俺たちは君の君の陥つた不幸から、尊い人生の教訓を受ける事は出来る。人間は弱くて罪と隣り合せて生きてゐる事實を、まともに知らせられる。而して俺たちは君に同情出来るのだ、君を憎んだり卑下したりする事は、俺たちには出来ないのだ。』

虚偽を以て假裝せる殻を破つて、自分の心の奥底に潜んで居る惡心に氣付い

たならば、どうして世間や他人の罪惡を責むることが出来やう。音に他の犯跡を咎めることが出来ないのみならず、よしや表面は冷やかな様に見えるても世間の底を流れてゐるものは、涙を以て噛みしめたい様な、愛と美を以て充たされて居るやうに思はれて来る。要は自己の問題である、自覺である、自分の衷心内部生活に自覺することである。かく偽らず、飾らざる全自己を提出して、此の第一章を咀嚼するならば、誰れかこれ以外に何物を要とする心が起り得やう。歎異鈔一部の始終に溢れて居る親鸞聖人の信仰も、其の源に溯れば、すべて此の第一章に含蓄して残るところは無い、すなはち以下の諸章は、此の源頭より涌き出で、流れ盡きせぬ親鸞聖人の法悦である。

第二章

一 おのく十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり、しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにく、おほしめして、おはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり、もししからば南都北嶺にも、ゆゝしき學生たちおほく坐せられてさふらうなれば、かのひとくにもあひたてまつりて、往生の要

よく／＼きかるべきなり。

親鸞しんらんにおきては、たゞ念佛ねんぶつして彌陀みだにたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信しんずるほかに別べつの仔細しさいなきなり、念佛ねんぶつはまことに淨土じやうどにむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄ぢごくにおつべき業ごふにてやはんべらん、總そうじてもて存知ぞんちせざるなり、たとひ法然上人ほふねんしやうにんにすかされまひらせて、念佛ねんぶつして地獄ぢごくにおちたりとも、さらに後悔こうくわいすべからずさふらう、そのゆへは、自餘じよの行やうをばげみても佛ぶつになるべかりける身みが、念佛ねんぶつをまふして地獄ぢごくにもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔こうくわいも

さふらはめ、いづれの行やうもおよびがたき身みなれば、とても地獄ぢごくは一定いちぢやうすみかぞかし。

彌陀みだの本願ほんぐわんまことにおはしまさば、釋尊しやくそんの説教せつけう虚言きよごんなるべからず、佛説ぶつせつまことにおはしまさば、善導ぜんだうの御釋おんしやく虚言きよごんしたまふべからず、善導ぜんだうの御釋おんしやくまことならば、法然ほふねんのおほせそらごとならんや、法然ほふねんのおほせまことならば、親鸞しんらんがまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらう歟か。

詮せんずるところ、愚身ぐしんが信心しんじんにおきてはかくの如ごとし、このうへは念佛ねんぶつをとりて信しんじたてまつらんとも、またすてんとも、面々めんめんの御おん

はからひなりと云々。

「たとひ百千億萬、恒沙無量の佛を供養せんよりも、如かず道を求めて堅正にして卻かざらんには」とは、師の佛世自在王如來に申し上げられし、法藏比丘の告白であつた。所謂「道」とは如何なる道か。「吾れ誓ひて佛となり、一切の恐懼の爲に大安を作さん、これが求めらるゝところの道であつた。而うして此の「道」の爲には、「たとひ身を諸の苦毒の中におくとも、我が行は精進にして、忍びて終に悔いざらん」と誓言せられた。堅正不卻の御態度、偉大とやいはん崇高とやいはん、かくては何事か成らざるべき、何物か得られざるべき。果して師の佛世自在王如來は「たとへば一人にて大海を升量せんに、劫數を經歷せば、なほ底を窮めて其の妙寶を得べきが如し。人あり至心精進に道を求めて止

まざらばかならず當に尅果すべし、何の願か得ざらん」と激勵せられた。かくて成就せられたるが南無阿彌陀佛の大道である。この大道は、不安恐怖に惱める吾等に、大安住を得せしめんとて成就したまひ、常に吾等の前に展開せられてあるのである。しかもなほ安心が出来ない、信仰が得られないといふ者あらば、それは「求め」ないからである、堅正不卻に求めないからである、大海升量の覺悟で求めないからである、不惜身命で求めないからである。求めよ、かならず得らるゝ、求むる者に得られないことは無いのである。今親鸞聖人が、はるゝ關東から、道を求めて上京したる御同朋に對して「おのゝ十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり」と仰せられたる、この

おことばの中には、世自在王如來が、法藏比丘の堅正不卻なる志願に對して「かならず當に尅果すべし、何の願か得ざらん」と仰せられた、あの佛が偲ばるゝ、「身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし」……よくぞ求められた。與へらるゝ得らるゝ、かならず得らるゝ。けれども、其の「道」は眞向ふに唯一線なることを忘れてはならない。それは南無阿彌陀佛の大道である、本願の白道である。然るにこの親鸞が、念佛より外に往生の道をも存知し、また色々の法文なども知りたるらんやうに、奥床しくも思うてそれを聞かうと志しての上京ごもならば、大きな思ひちがひである。若しも

其のやうなことであるならば、奈良や叡山にこそ、優れたる學者達の多勢居られることであらば、尋ねまわりて聞かれたがよい。この親鸞は、曾て居山二十年、念佛より外の道たる觀心修行を勵んでみたけれど、道きはまつてゆくてを塞ぎたるは、狂ひ叫ぶ怒濤の如き我が貪欲と、世界の破滅を告ぐる劫火の如き吾が瞋恚とであつた。進退きはまつて、死ぬにも死なれぬ窮境にせまつたとき、ゆくりなくも法然上人にあひたてまつりて「たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」との仰せをかうふり、坦々たる大道、我がこの貪瞋煩惱の胸中に展開して、ゆくてをさへぎる何物もなくなつた。この「道」の通じて達するところは何處、如何なる處か、地獄か、極樂か、それは知らない。よしや法然上人に欺かれて、その行く先きが地獄であつても、貪瞋煩惱の外に何物をも持たな

い此の親鸞に、それを後悔する資格はない。

わかりましたか、納得が出来ましたか。彌陀の本願には「信する者を必ず救ふ」と誓はれた。信するとはどうすることか、釋尊は「其の名號を聞け」と仰せられた。何を聞くか、いふまでもない聲を聞くのである。誰れ人の聲を聞くか、善導大師は「西岸上に人ありて喚ふ」と仰せられた、本願招喚の勅命である、阿彌陀如來の御聲を聞くのである。御聲が聞えますか。此の親鸞には、たしかに「聞えました、それが法然上人の仰せである」「南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本」「南無阿彌陀佛が、すなはち本願招喚の勅命である。聞えますか、御聲が聞えますか、私がいふのではない、親鸞がまうすのではない、わかりましたか、納得が出来ましたか。親鸞におきては、これより外に別の子細はない、

この上は、取らうと、捨てやうと、おの／＼面々各自の思ひのまゝ、切角御大事に……。

以上が第二章の梗概である。切々の慈誨、まのあたり耳の底に響くやうである。はるばる關東からのぼられた同行達、如何に法悦にむせんだそであらう。この上に申し述べることはないのであるが、味へば味ふほど、津々として盡くるどころなき味ひが湧き出づる。されば、しばらく(一)何をか求むる、(二)よき人の仰せ、(三)聞くが即ち信するなりといふ三項として、更に此の章の意味を咀嚼したいと思ふ。

一、何をか求むる

何をか求むる

凡そ生きとし生けるものに、求むるところの無いものはない。生きるといふことが、即ち求むることであるから、若しも求むるところが無いならば、それは木石に等しいもので、生きたるものではないのである。而して生きたるものは、各自に個性を有する個體であるから、其の時、其の場合、求むるところも亦必ず唯一でなければならぬ。目的の爲めに手段を云々するは、誤れるも甚だしきもので、手段が即ち目的でなければならぬといふもの、正しくこれが爲めである。道を行くに、同時に二線を執る能はざるは、自明の事實であるが徒に多岐茫洋たるに迷ひ、二兎を追うて一兎を得ざるの痴態を演じ、日夜焦躁して安きを得ざるもの、世滔滔として皆然らざるはない、深く思ひをいたさねばならないことである。

既に唯一人の、求むるところも亦唯一道であるならば、其の求むるや、身心の全體、問題の全部を提げて、與へられたる道に向つて進まねばならぬ。頭部は前程に、脚根は後方にといふやうな、曲藝を以て進行することの不可能なるは、誰れとて知らぬものは無いが、心はゆく、遙に進み、身は後方で逡巡して居たり、若しくは其の反對に、心を後に遣し留めて、身のみ獨り前路を驅けるといふやうな事は、誰もが日々夜々に實演して居るところである。かくて道の得られざるを歎き、安きを得ずして悶え苦しむ、寧ろ呆氣にとられて云ふところを知らずと申さねばならぬ。須く汝が全心の全問題を提供して、隨時隨所に與へられたる道に向つて進め、何物かこれを遮り得よう、坦々たる大道、必ずや往くとして可ならざるはない。若し得られざることあらば、それは邇きに在

る道を、遠きに求めて居るからだど覺悟せねばならぬ。

そのむかし文殊菩薩、釋尊の旨を奉じて、印度南方の、莊嚴幢沙羅林といふ林の中に法筵を張られたことがある、參聽の老若男女、無慮二千と註せられた。文殊菩薩の大獅子吼に、さながら陶然として酔へるが如くであつたが、一座終りを告ぐるや、なだれを打つて四散したのである。然るに唯一人の善財童子といふ少年のみが、蹈み止まつて更に文殊に就て誨へを乞ふたのであつた。蓮如上人は、國に一人、郡に一人、所に一人と歎かれてあるが、眞面目なる求道者の少なきは、昔も今も變りはないと見える。すなはち唯一人の善財童子のみが、自己身心の全問題を提げて、文殊菩薩の示されたる道に向つて突進したのである。

「唯願はくば聖者、廣く我が爲に、云何が菩薩の行を學ぶべき、云何が菩薩の行を修すべき、云何が菩薩の行を成就すべきかを説きたまへ」とは、その時善財童子が、衷心を披瀝しての哀願であつた。時に文殊菩薩、善財童子に告げて申さるゝやう。善哉、善哉、善男子よ、汝よく菩提心を發して、菩薩の行を求めた。善男子よ、若し人ありて、菩提心を發す、是の事難しと爲す、況んや發心して菩薩の行を求むるは、更に難いことである。善男子よ、決定して菩薩の行を成就したいと思ふならば、必ず眞の善知識を求めねばならぬ。善男子よ、これより南方に妙峰山といふがあたりて、その山中に德雲比丘といふ善知識が居らるゝ。往きて問へ、云何が菩薩の行を學び、云何が菩薩の行を修し、如何が菩薩の行を成就すべきと。德雲比丘必ず汝が爲に、説いて聞かして下さ

るであらう。それから更にかずくの善知識に、いろくの法を教へて戴くことであらうと思ふが、善男子よ、善知識を求めんに疲倦の心を起してはならぬ。善知識に就て嫌厭の心を起してはならぬ、善知識の上に過失を見てはならぬ、善知識の教誨には、心底より随順せねばならぬと、諄々として訓誡せられたのであつた。すなはち汝の身心を傾注し、汝の全問題を提供して、導きたまふところに進むべきを、警告せられたものである。

かくて善財童子は、文殊慇懃の慈訓を身に體して、先づ徳雲比丘の許に馳せ参じ、次第にもろくの善知識を歴訪して、前後五十五人の師教を受けたのであるが、第五十三次の善知識、南方海岸國の彌勒菩薩、善財童子に告げらるゝやう。善男子よ、汝これまで多くの善知識に教へを受けて、菩薩の道を學ぶこ

この出來たるは、是れ偏に文殊菩薩の懇切なる訓誡の賜物である。されば、往きて文殊菩薩に其の得るところを言上せよ、必ずや、重ねて誨へたまふところあらんと。茲に善財童子は、もと來し道を還り行くと一百十餘城、最初の恩師文殊菩薩の許に歸着して、具さに所得を言上したのであつた。時に文殊菩薩の満悦したまへることは、恰も長途の旅を事なく歸つた愛兒を迎へし慈母の如くであつた。かくて文殊菩薩の引接により、最後の善知識、普賢菩薩にあひたてまつりて、善財童子の初發心を成就することを得たるは、阿彌陀如來の本願力に乗じて、西方安樂世界に往生を得るといふことであつた。

はるく關東から、十餘箇國のさかひをこえて上京した同行達に、誨へ示されたる道は何であつたか、親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられま

ひらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別の子細なきなり」といふ仰せであつた。よきひとのおほせとは、法然上人のすゝめたまふところである。法然上人は何と仰せらるゝか、「南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本」往生の道は念佛の法、南無阿彌陀佛の一道なりとの仰せである。而して法然上人は、特に善導大師に依られたお方である。善導大師は何と仰せらるゝか、東西に通じたる道は、唯一線、本願の白道のみだと仰せらるゝ。而して西岸上より阿彌陀如來は、汝一心正念にして直に來れと喚び給ふと仰せらるゝ。更に釋尊の教へに溯れば、「聞其名號、信心歡喜」。その名號を聞くと仰せらる。經釋一貫、師資一轍、「たゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべし」と、信するより外に他の道はない。なせであらうか、そもく阿彌陀如來の本願が

信するもの若し生れずば、正覺を取らずとの御誓ひで、その誓願の成就したるが、南無阿彌陀佛の名號であるからである。

曾て師教を被りし關東の同行達である、阿彌陀如來を敬禮しない者はない、南無阿彌陀佛を稱へない者はない。然るに南無阿彌陀佛を稱へながら、彌陀如來を敬禮しながら、何の爲に、はるく十餘箇國のさかひをこえて上京したのであらうか、我れ一人の行く道は、唯一道であることに氣づかなかつたからである。我が身心の全問題を提げて、與へられたる道に向はなかつたからである。邇きにある道を、遐きに求めたからであつたのである。哀れはるく上りて師の聖人からうけたまはるところは、關東の我が家に於て、常に禮し、常に稱へて居つたところの「念佛して彌陀にたすけられまひらすべし」と信するこ

とであつた。

獨り昔の關東の同行達とのみいはんや、今日現在の吾れ々各自、邇きにある道を退きに求めてはならぬ。出發點が即ち到達點である。一人の行くべき道は、常に唯一線である。自己身心の全問題を提げて、與へられたる道に向へば、極促の一念に、久遠劫來、盡未來際の問題解決して、廣大難思の慶心に安住し、坦々たる本願の大道を、勇往邁進することが出来るのであると、覺醒せしめなければならないことである。

二、よき人の仰せ

よき人の仰せ

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よきひと

のおほせをかうふりて信するほかに、別の子細なきなり」と仰せらるゝ。別の子細なきなりとは、別に深い理窟は知らぬ。知らうと思はぬ、知らうと思ひはからうべきでないといはるゝのである。これが『執持鈔』の方では、更に精しく次のやうに記されてある。

是非しらず、邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり。往生淨土のためには、たゞ信心をさきとす、そのほかをば、かへりみざるなり。往生ほどの一大事、凡夫のはからうべきことにあらず、ひとすぢに、如來にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒菩薩をはじめとして、佛智の不思議をはからうべきにあらず、まして凡夫の淺智をや。かへすく如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり、

これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり。

是非も知らねば、邪正もわきまへぬ凡夫の身で、どうして往生ほどの一大事をはからうことが出来やうか。獨り吾等凡夫のみではない、あと一段で佛果に達するといふ、等覺補處の位にまで達せられた彌勒菩薩でさへ、佛智の不思議に對しては、たゞ釋尊の仰せのまゝを信じて、敢て疑ふところあらずと告白して居らるゝ。まして凡夫の身としては、ひとすぢに如來の御ちかひにまかせてまつるべきである。それゆゑに、この親鸞におきては「たゞ念佛して、彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信するほかに、別の子細なきなり」と仰せらるゝのである。「よきひと」とは、源空聖人のことで、前記『執持鈔』のつゞきの文には、次のやうにいはれてある。

よきひと

されば、われとして淨土へまいるべしとも、また地獄へゆくべしともさだむべからず。故聖人のおほせに（黒谷源空聖人の御ことはなり）源空があらんところへ、ゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへ、まいるべしとおもふなり。このたびもし善知識にあひたてまつらば、われら凡夫、かならず地獄におつべし。しかるにいま聖人の御化導にあづかりて、彌陀の本願をきき、攝取不捨のことわりを、むねにをさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土のむまれがたきを一定と期すること、さらにわたくしのちからにあらず。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが、地獄の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと、聖人さづけたまふにすかされまいらせて、われ地獄におつとい

ふども、さらにくやしむおもひあるべからず。そのゆへは、明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて惡道へゆかば、ひとりゆくべからず師とともにおつべし。さればたゞ地獄なりといふども、故聖人のわたらせたまふところへまいらんと、おもひかためたれば、善惡の生所、わたくしのさだむるところにあらずといふなりと。これ自力をすて、他方に歸するすがたなり。

「念佛は、まことに淨土にむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、總じてもて存知せざるなり。」是非も知らねば、邪正もわきまへない、全く自己に盲目な凡夫の身は、自分で自分の行く先のわか

らないものである。それが南無阿彌陀佛の内容の穿鑿をして、淨土にむまるゝたねならん、いや地獄におつる業ならんなどと、思ひ煩ふやうなことをするならば、痴人の夢を語るにも増したる、いたづら事といはねばならぬ。よしんば念佛するが地獄の業たるを、いつはり往生淨土の業因ぞとさづけたまうに、欺かれたりとしても、それを後悔することは、自分の行くべき道を、念佛より外に求め得る人のことである。されば、念佛は淨土に生るゝたねか、地獄におつる業かを詮議する前に、先づ自分は如何なるものなるかを省察せねばならぬ。「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」このたび明師にあひたてまつらでやみしならば、決定惡道へゆくべき身であつた、この身がどうして、よき人の仰せに對し、とやかくのはからひを起すことが出來や

うといはるゝのである。「地獄は一定すみかぞかし」とは、何といふ徹底したる御自覺であらう。もう窮すれば必ず通ずる、地獄は一定すみかぞかしと、自己内心のどん底を窮めた時が、即ち本願の大道坦々として、その前に展開せられた時である。自らはからうは、道に遠ざかる所以である。己れを空しうして進めば、行くとして可ならざるなく、求めざるに、道は隨所に得らるゝものである。

『法華經』の信解品に、長者窮子の喩へが説かれてある。某の長者に一子あり幼時父を捨て、久しく他國に放浪しけるが、窮困甚だしく、歳五十に達して尙ほ且つ四方に衣食を求めて居る。父なる長者は、子と離別して茲に多年、つねに子を念ふ事止む時はなかつたが、特に老朽して、餘命幾ばくもなきを知る

長者窮子の喩

や、子を憶ふの情切にして、殆んど堪へないばかりである。時に當りて、窮子漸次に遊行して、たま／＼本國に向ひ、國邑を経歴して、遂に其の父の所に達した。門前に佇立して、邸宅の結構を観るに、境域の廣大なる、輪奐の美を極めたる、さながら王公の宮殿かと驚かるゝばかり、これ我が衣食を求むべき處にあらず、しかず、貧里に至りて衣食の得易からんにはと、この念ひをなし已りて、疾く走り去つた。時に父なる長者、これを見てすなはち我が子なることを識り、心大に歡喜して、人を遣はし急に追はしめた。使者疾く走り往きて、遂に彼れを捉へた。窮子驚愕して、大に叫ぶらく「我れ犯すことなし、何ぞ捉へらるゝ」と。けれども、使者これを執ることいよく急にして、強ひて將ゐて還つた。時に窮子おもへらく「罪なくして囚へらる、必定して死せん」と、

惶怖措くところを知らず、悶絶してしまつた。そこで父なる長者は、使者に命じて、冷水を面に灑ぎ、醒ましてこれを放たしめた。おもへらく、彼れまことに我が子なれども、哀れ志し下劣にして、いふとも信ずること能はざらん、如かず、しばらく彼れの欲するまゝに往かしめんにはと。使者告げていはく、「今、汝をゆるす、意の趣くところに隨へ」と。窮子歡喜することいふばかりなく、すなはち馳せて貧里に至り、衣食を求めた。時に父なる長者は、何とぞして其の子を誘致せんと欲し、ねんごろに方便を設け、密かに、形容憔悴して見るかげもなき二人の者を選び、告げていはく「汝等かしこにいたり、徐ろに窮子に語れ、こゝに一つの作業あり、若し従事せばあたひを興へんと、窮子諾せば、將の來りて作さしめよ、若し何をか作すと問ふことあらば、すなはち語れば、

汝を雇ふことは、糞を除はしめんが爲めなり、我等二人も、亦汝と共に作さん」と。二人の使者、すなはち窮子を求めて、具さに上のことを告げ、來りて共に糞を除ふことゝなつた。茲に父なる長者は、その子に近づくことを得て、つねに語りていはるゝやう「汝ながく此所にて作業に従事せよ、また他に去ること勿れ、汝に價を加ふべし、飲食、調度、すべて汝の所用を支給せん、意を安んせよ、今より已後、汝を眞實の子の如くせん」と。居ること二十年、諸の庫藏に收むる金銀珍寶、悉く窮子をして處理せしむるやうにした。かくて父子の眞情、漸く通するやうになつたのであるが、父なる長者は、老來病加はりて、終焉の期近づける時、窮子及び親族、國王、大臣、刹利、居士等を集めすなはち自ら宣べて言く「諸君當に知るべし、此は是れ我が子なり、我が所生

なり、幼にして、吾を捨て、逃走し、辛苦のあひだにさすらふこと五十餘年、我れ亦永く憂ひを懷いてたづね覓めたことであつたが、漸くにして再會することを得た、此れ實に我が子なり、我れ實に其の父なり、今吾が所有の一切の財物は、皆是の子の有である」と。時に窮子は、父の此の言を聞き、大に歡喜して「我れ本、心に怖求するところ有ること無かりき、今此の寶藏、自然にして至りぬ」と、まことに未曾有のおもひに堪へないことであつた。

父とは知らぬ父の情で、遣はされたる二人の使者と共に、知らぬ我が家で、糞を除ふの作業に従事して居つた窮子は、年を重ねるに隨ひ、衣食調度、思ひのまゝに支給せられ、遂には家財珍寶處理の全權まで、悉くまかせらるゝに至つたけれども、其の身はやはり河原の小屋に起き臥しして、通勤して居つたので

善財童子
及び窮子
と關東の
御同朋

ある。即ち何等の慾心を逞しくすることなく、非望を起すことなく、與へられたる作業に、身心を傾注して従事して居つたのである。かくて父なる長者の終焉に際し「此れ實に我が子なり、我れ實に其の父なり、今吾が所有の一切の財物は、皆是の子の有である」との聲を聞くや「我れ本、心に怖求するところ有ること無かりき、今此の寶藏、自然にして至りぬ」と、衷心より湧き出づる満悦を禁ずることが出来なかつたのである。「華嚴經」の善財童子は、數多き善知識を歴訪し、道を求めて道を得た。今「法華經」の長者窮子は、求めざるに與へられた。一見その行き方が全く背反して居るやうであるけれども、翫味すれば全く其のむねを一にして居るのである。善財童子の道を求むるや、自分のはからひで、描き出せる要求があつたのではない、己れを空しうして、たゞ與へら

る、まゝを得たのである。即ち求めずして得たる長者窮子と、全く其の旨を
 にして居るのである。吉水の禪坊に尋ねまゐりて、法然聖人の教へたまふま
 に、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、凡夫直入の真心を決定せられた親
 鸞聖人も、亦實に求めざるに與へられたる人であつた。今その聖人の御前に、
 はる／＼十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづね來られた
 御同朋達も、虚往實歸、己れを空しくして道を與へられ、求めざるに得たるの
 法悦を、覺えたことであらうと思はるゝのである。

一善財童子には、文殊菩薩といふ、哀愍擁護したまふ善知識があつた。長者の
 窮子には、父の情で遣はされた、二人の使者といふ御同朋があつた。親鸞聖人
 には、たとひ地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまゐらん

といふ『よき人』があつた。而して關東の御同行達には、十餘箇國のさかひをこ
 えて、身命をすてゝも、たづねまゐらずには居られない、親鸞聖人があつた。
 文字で道は得られない、言語で信仰は確立しない、主義や意見の一致といふや
 うなことで、道を論じ信仰を談じやうとするならば、それは誠に悲惨なる滑稽
 である。文字や言語、主義や意見を超越して、人格と人格と、抱擁して離るゝ
 ことの出来ないところに、始めて信仰の共鳴を覺ゆるのである。即ちたとひ地
 獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまいらんといふほどに、
 抱擁して離るゝことの出来ない『よき人』があつて、始めて「念佛して彌陀にた
 すけられまいらすべし」といふ、信仰の徹底味を覺ゆるのである。親鸞聖人の
 常に御同朋御同行と呼びかけらるゝは、聖人の全人格を以て、吾等を抱擁した

まふ御聲なることを忘れてはならないのである。

三、聞くが即ち信ずるなり

前に申したやうに、阿彌陀如來むかし法藏比丘たりし時、師佛世自在王如來より、至心精進に道を求めて止まざれば、かならず當に尅果すべし、いづれの願か得ざらんととの激勵を受け、無上殊勝の願をおこしたまひ、其の心寂靜にして毫も執着の志念なく、唯聽察を垂れたまへとて、中心の所誓を、師の佛に啓白せられた。必成を期せらるゝもの凡そ四十有八、具さにのべをはりて、重ねて誓言したまふやう。

我れ超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、斯の願満足せずんば、誓ふ正覺

超世の大願こそ成就

を成らす。我れ無量劫に於て、大施主と爲り、普ねく諸の貧苦を濟くはずんば、誓ふ正覺を成らす。我れ佛道を成るに至り、名聲十方に超えん、究竟して聞ゆるところなくば、誓ふ正覺を成らす。

「斯の願満足せずんば、誓ふ正覺を成らす、何といふ力強い堅固なお誓ひであらうか、げに大音限なく法界に徹る響がある。果して天の一方より反響があらはれた、「決定して必ず無上正覺を成らん」と。かくも必成を期せられた大願は如何なる願ひであらせらるゝか。「我れ無量劫に於て大施主と爲り普ねく諸の貧苦を濟くはん、願ふところは即ちこれである。貧苦とは、別に富貴のものあり、それに簡びて貧苦のものといはれたのではない、諸の貧苦である、凡てのものが、貧しき者である。理智の淺薄なる、情操の陋劣なる、意志の脆弱な

る、誰れかこの外に出づるものがあらう。若しも誇り顔する者があるならば、それは無反省の人であり、自己を知らざる者であり、唾棄すべきうぬ惚れの人であつて、最も貧苦の人であるのである。かゝる貧苦の人々の爲に、大施主とならんといふが、法藏比丘の誓願である。この可憐なる、貧しきすべての者に何を、如何にして施さんとせらるゝか。我れ佛道を成るに至り、名聲究竟して十方に聞えん、御名を、御聲にて、あらゆる人々に聞かしめんとのお誓ひである。

かくて不可思議兆載永劫の間、勇猛精進にして、志願聊かも倦怠したまふことなく、諸の衆生の爲に、南無阿彌陀佛といふ御名を成就し、今現に西方の清淨なる安樂世界より、常に、不斷に御聲によりて、御名を吾等に聞かしめた

御名を御聲にて聞かしめん
さのお誓

まうて居らるゝのである。それゆゑに釋尊は「其の名號を聞き、信心歡喜し乃至一念せんものは、至心に廻向したまふがゆへに、即ち不退轉に住して、彼の國に生るゝことを得」と説かれてある。こゝを以て彌勒菩薩は「今佛に値ひ無量壽佛の聲を聞くことを得て、歡喜せざるなし、心開明を得たり」とのべて居らるゝ。釋尊重ねて「汝(彌勒)及び十方の諸天人民、一切四衆、永劫已來五道に展轉し、憂畏勤苦、具さに言ふべからず。乃至今世まで生死絶えず、佛と相値うて經法を聽受し、無量壽佛を聞くことを得たり、快哉、甚だ善し。……汝等宜しく各精進に心の所願を求むべし、疑惑中悔して、自ら過咎を得ることなかれ」と、懇切に教誨せらるゝや、彌勒菩薩は「佛の重誨を受け、專精に修學し、教の如く奉行して、敢て疑ふところあらず」と啓白して居らるゝ。

因人の最上、等覺位の彌勒菩薩、展轉五道の凡夫に伍して、無量壽佛の聲を聞き、信心歡喜して敢て疑ふところあらず、釋尊の誨へたまふまゝに、修學奉行せんと申して居らるゝ。即ち一切の人、等しく貧苦にして、俱に如來の大施を蒙りて居るのである。

更に無量壽佛の御聲、南無阿彌陀佛の御名を聞きて大安慰を蒙り、必得往生の幸慶を得たるは、觀無量壽經に於ける、下々品の極重惡人である。文に曰く「或は衆生ありて、不善業を作り、五逆十惡、諸の不善を具せん……かくの如きの愚人、命終の時に臨み、善知識の種々安慰して、爲に妙法を説き、教へて念佛せしむるに遇はん。此の人、苦に逼められて念佛するに違あらず、善友告げて言く、汝若し念すること能はずば、應に無量壽佛を稱すべしと。かくの如く

御名に救はれし觀經下品の惡人

至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿彌陀佛と稱せんに……即ち極樂世界に往生を得ん」と。五逆十惡等のもろくの不善業をのみ作したる、極重の惡人が、今や人世終焉の期に臨んで居る。茲に如來の使ひとして教化の善知識來訪せられ、南無阿彌陀佛の妙法を説き聞かせ、専ら佛恩を憶念して、終焉を待つべく教へられた。此の人、聞きて大安慰に住することが出来たけれども、末期の苦に逼められて、念々相續するの違がない。そこで善知識更に懇切に誨へたまはく、苦しからう、苦しからう。よろしい、よろしい。たゞ御名を呼べ、たゞ御名を稱へよ。それ、南無阿彌陀佛……教へらるゝがまゝに、十聲南無阿彌陀佛と稱へて、御親の御國、安養淨土に往生して戴いたのである。終焉の苦しみに懊惱せる、極重の惡人が何によりて大安

慰に住することを得たか、善知識の教へらるゝ南無阿彌陀佛の妙法を聞いたか
らである。苦逼失念のその中から、十聲の南無阿彌陀佛は如何にして現はれた
か、善知識の教へたまふ御名の聲が、其のまゝ徹到し、反響して、我が呼ぶ御
親の御名となりて現はれたのである。

善導大師の觀經玄義分に、下々品の極重惡人が稱ふる十聲の佛名には、願と
行とを圓滿に具足して居るから、必ず往生を得る旨を顯はして「南無と言ふは
即ち是れ歸命なり、亦是れ發願廻向の義なり、阿彌陀佛と言ふは即ち是れ其の
行なり、此の義を以ての故に、必ず往生を得」といはれた。親鸞聖人この旨趣
を體驗して、更に次のやうにいはれてある。

歸命とは本願招喚の勅命なり。

六字の意
義

發願廻向と言ふは、如來已に發願して、衆生の行を廻施したまふの心なり。
即是其行と言ふは、即ち選擇本願是れなり。
必得往生と言ふは、不退の位に至ることを獲ることを彰はすなり。(本典行
卷)

極重の惡人も、必ず往生することが出来る(必得往生)。何せなれば、阿彌陀
如來の願行が、即ち吾等の願行であるからである(即是其行)。どうして如來の
願行が、即ち吾等の願行となるか。法藏比丘の、無量劫に於ける發願修行は全
く貧苦の吾等が爲に、大施主となりたまふ爲めであつた。乃ち如來已に發願し
て、衆生の行を廻施したまひけるがゆゑに(發願廻向)如來の願行が、即ち吾等
の願行である。それは果して如何なる機會、如何なる場合に於てあるか。本

願招喚の勅命の聞えた時、御親の聲に覺醒した時(歸命)如來の願行が、即ち吾等の願行となりて、不退の位に安住することを得るのである。下々品の極重惡人が苦逼失念の終焉に臨みて、善知識の慈教の許に大安慰の人となり、必得往生の幸慶を得たるが、正しく其の適例であるのである。

我れ佛道を成るに至らば、名聲普く十方に聞えしめんとは、法藏比丘の誓願であつた。此の願正しく成就して、南無阿彌陀佛の大音を、普く十方に響流せしめんとて、世に出でたまへるが釋尊である。それゆゑに、彌勒菩薩は釋尊の教誨によりて、親しく無量壽佛の聲を聞き、下々品の極重惡人は、善知識の教誨を、其のまゝ南無阿彌陀佛の聲と聞き、必得往生の幸慶者となつた。故聖人のおほせには、親鸞は弟子一人もたずとこそあほせられ候ひつれ。そのゆゑ

釋尊の説法

は如來の教法を十方衆生にとききかしむるときは、たゞ如來の御代官をまをしつるばかりなり。さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の教法を、われも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり。そのほかに、なにををしへて弟子といはんぞとおほせられつるなり。さればとも同行なるべきものなり。これによりて、聖人は御同朋御同行とこそ、かしづきておほせられけり。——運如上人御文章——説く者、聽く者、その中心の如來なることを、常に忘れてはならない。釋尊の教説が、何せそのまゝ無量壽佛の聲なるか。安養淨土の莊嚴は、唯佛與佛の知見なり。「佛意のまゝを説きあらはしたまふは、亦た佛のみ能くしたまふところである。乃ち釋尊の教説したまふ南無阿彌陀佛の妙法は毫末も改易なく變化なく、全く南無阿彌陀佛のまゝの顯現であるからである。

第二章 三、聞くが即ち信するなり

善知識の教語が、どうして其のまゝ無量壽佛の聲であるか。如来の教法を十方衆生にとききかしむるときは、たゞ如来の御代官をまをしつるばかりであるからである。されば、説く者、即ち教化の事に従ふものは「如来の教法を、われも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかり」でなければならぬ。又聴く者は何處、如何なる人の仰せであらうとも、彌陀にたすけられまひらすべし」と聞く即ち如来の御聲を聞くの想ひでなければならぬ。かくの如く、説く者、聴く者常に如来を中心とするの落處を得るならば、聞きたびごとに、如来の聲を聞き佛凡一體、生佛一如で相續するの生活となる。茲に「聞くが即ち信するなり」といふ味ひがあるのである。

説者と聽者

今「彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず。佛説

まことにおはしまさば、善導の御釋虚言したふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまをすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟」と仰せらるゝ。聴くは十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御同朋、御同行であり、説くは如来の御代官をまをしつるばかりの親鸞聖人である。正にこれ如来を中心としたる説者、聴者で、如来の大音、さながらに耳底に響くの趣きがある。法然のおほせまことならば、親鸞がまをすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。無量壽佛の御聲を、其のまゝ親鸞聖人に傳へられたるは「智慧光の力より、本師源空あらはれて、淨土眞宗をひらきつゝ、選擇本願のべたまふ」たどころのよき人である、どうしてそらごとのあらう筈

がない。それゆゑに「たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の真心を決定」せられたのであつた。かゝる聖人の口づから「親鸞がまをすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟」と仰せらるゝ、はるゝたづねまゐりし御同朋達、如何に隨喜の涙に咽びしことであらうか。更に仰せをたゞりて溯れば「善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや」と仰せらるゝ。善導大師は觀經玄義分の初めに「十方恒沙の佛、六通をもて我れを照知したまへ、今二尊の教へに乗じて、廣く淨土門を開く」と宣べたまふた。いはゆる二尊の教へとは、次に「仰ひて惟れば、釋迦は此の方にして發遣し、彌陀は即ち彼の國より來迎す、彼こに喚び、此こに遣はす豈ゆかざるべけんや」とあるもの即ち此れで、釋迦彌陀二尊の教勅のまゝを、恒沙の如來照覽の

前にて、さながらに説き述べたまへるが、觀經の疏四帖の大文字である。それゆゑに法然上人は、彼の『散善義』に「一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざる者は、是を正定の業と名く、彼の佛の願に順するが故に」とある文によりて、面のあたりに彼の佛の願、即ち本願招喚の勅命を聞かれたのであつた。

されば、釋迦彌陀二尊の教勅が、そのまゝ善導の御釋であり、法然の仰せであり、親鸞がまをすむねである。かゝる傳持相承の教語の間に、南無阿彌陀佛の大音を聞くことの出来ないものは、去つて「ゆゝしき學生達」に就き、無用の法門沙汰に、閑葛藤をこゝすべきである。それゆゑに「詮するところ、愚身が信心におきてはかくの如し、このうへは念佛をとりて信じたてまつらんと

も、またすてんども、面々の御はからひなり」とて、別れを告げられたものである。

第三章

一 善人をもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいはいく、悪人を往生す、いかにいはんや善人と。この條、一旦、そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。

そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろ

かげたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だに往生す、まして悪人はとおほせさふらひきと云云。

第一章に「彌陀の本願には、老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要と

すとしるべし、その故は、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願に
 てまします」とあつた。これは罪惡深重の衆生をたすけたまふの本願が、即ち
 善人惡人を平等にたすけたまふの本願なることを示したものである。そのゆゑ
 は、惡人のほかに、別に善人があるではない。虚偽を以て假裝せる殻をやぶつ
 て、自分の心の奥底を凝視するならば、誰れか其の犍猛なるに戰慄せざるもの
 があらう。をしなべて皆煩惱具足の凡夫である。それゆゑに、罪惡深重煩惱熾
 盛の衆生をたすけたまふの本願が、即ち老少善惡のひとをえらばれず、平等に
 たすけたまふの本願なることを申しのべて置いた。されば如何に努力して善根
 を積み、功德を重ねても、其の基礎、其の根柢が、煩惱具足の心であつて見れ
 ば、所謂有漏の善、有漏の行で、恰も砂上に樓閣を築くに等しく、全く無意義で

ある。

覺如上人『口傳鈔』に曰く「惡業をばをそれながらすなはちおこし、善根をば
 あらませごもうることをあたはざる凡夫なり。かゝるあさましき三毒具足の惡機
 として、われと出離にみちたえたる機を攝取したまはんための五劫思惟の本願
 なるがゆゑに、たゞあふぎて佛智を信受するにしかず。しかるに善機の念佛す
 るをば決定往生とおもひ、惡人の念佛するをば往生不定とうたがふ。本願の規
 模に失し、自身の惡機たることをしらざるになる。おほよそ凡夫引接の無
 縁の慈悲をもて、修因感果したまへる別願所成の報佛報土へ、五乘ひとしくい
 ることは、諸佛いまだおこさるる超世不思議の願なれば、たとひ讀誦大乘、解
 第一義の善機たりといふとも、おのれが生得の善ばかりをもて、その土に往生

することかなふべからず。また悪業はもとよりよろろくの佛法にすてらるゝところなれば、悪機また悪をつのりとして、その土へのぞむべきにあらず。しかれば機にむまれつきたる善悪の二つ、報土往生の得ともならず、失ともならざる條勿論なり。さればこの善悪の機のうへにたもつところの彌陀の佛智をつのりとせんよりほかは、凡夫いかでか往生の得分あるべきや。さればこそ、悪もおそろしからずともいひ、善もほしからずとはいへ」と。前の第一章の終りを「しかれば本願を信せんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆゑに、悪をもおそろるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆゑに」と結ばれてあるのと全く同じ意味で、如來の本願に向つては、善悪の二つともに問題とはならないのである。

第三章の要目

善人と悪人の區別はない

然るに今此の第三章に於て「悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや」と謂ふは、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむいて居る。それゆゑに聖人はつねに「善人だに往生す、まして悪人はとおほせさふらひき」とて、特に善悪相對して示されたのは、まことに深長なるをばしめしのあること、伺はるゝ。それで此の第三章を、しばらく(一)善法と悪法、(二)自力と他力(三)悪人と他力の三段に分ちて、咀嚼して見たいと思ふ。

一、善法と悪法

世の中に善法と悪法、即ちして善いことゝ、して悪いことゝはあるが、善人と悪人、即ち善い人と悪い人との區別はないと思ふ。と申せば、甚だわからぬ

第三章 一、善法と悪法

いこと、のやうである。即ちして善いこと、して悪いことがあるならば、其の中なかのして善いことをする人は善人ぜんじんで、して悪いことをする人は悪人あくじんであらねばならぬ。然るに善いこと、悪いことはあるが、善い人と悪い人との區別くべつはないといふのであるから、甚だわからぬことことのやうである。がしかし、此の點てんが最も反省はんせいを要えうすること、即ち深く自ら顧かへりねばならないことである。第三者だいしやとして批評ひへうの位置ゐちに立ち、若しくは教をふる位置ゐちに起ちて、世よの中なかをながむるならば善いことをする善人ぜんじんと、悪いことをする悪人あくじんとを、簡單明瞭かんたんめいりやうに識別しきべつすることが出来る。尤も善惡ぜんあくの標準へうじゆんを、何なにによつて定さだむるかなどいへば、事甚だ面倒めんどうになるが、それが即ち他たを批評ひへうし、他たに教をへんが爲ための閑葛藤かんかつとうで、未解決みかいけつのままに存續ぞんぞくして置いても、何等支障なんらしじやうのあることでない。人世じんせいの事實じじつの上うへには人各ひとおの

いて善いこと、して悪いことをば、頗る明瞭めいりやうに心得こころえ分けて居る。たゞして悪いこと、知りつゝ、悪いことをするばかりではなく、して善いことをする場合ばあひにも、表裏へうりは常に各別かくべつで、外そとに賢善精進けんぜんしゆじんの相さうを現げんじつゝ、内うちには虛假不實こけふじつの心こころを抱いだいて居る。他たを批評ひへうし、他たに教をふるでなく、深く自ら反省はんせいした時に、誰たれか自ら、我われは善いことをして居る善人ぜんじんだと、會心あんじんの微笑ほゑをもらし得るものがあるか。

凡夫の往

覺如上人かくじよじゆじん『口傳鈔くつでんせう』に「おほよそ凡夫ぼんぷの報土ほうどにいることをば諸宗しよしゆゆるさゝるところなり。しかるに淨土真宗じゆつぜんしゆにおいて、善導家ぜんだうけの御おんころ、安養淨土あんやうじゆつどをば報佛ほうぶつ報土ほうどとさだめ、いるところの機きをば、さかりに凡夫ぼんぷと談だんす。このこと、性相しやうさうのみ、をおどろかすことなり。されば、かの性相しやうさうに封ふうせられて、ひとのこゝろお

第三章 一、善法と惡法

ほくまよひて、この義勢にをきてうたがひをいやく。そのうたがひのきざすところは、かならずしも、彌陀超世の悲願を、さることあらじと、うたがひたてまつるまではなけれども、わが身の分を卑下して、そのことわりをわきまへしりて、聖道門よりは、凡夫報土にいるべからざる道理をうかべて、その比量をもて、いまの眞宗をうたがうまでのひとは、まれなれども、聖道の性相世に流布するを、なにとなく耳にふれならひたるゆゑ歎、おほくこれにふせがれて、眞宗別途の他力をうたがふこと、かつは無明に癡惑せられたるゆゑなり、かつは明師にあはざるがいたすところなり」といはれてある。

これは、善導大師の觀經玄義分に「問て曰く、彼の佛及び土、既に報と言は、報法は高妙にして、小聖階ひ難し、垢障の凡夫、云何が入ることを得んや

答て曰く、若し衆生の垢障を論せば、實に欣趣し難し、正しく佛願に託するに由りて、以て強縁と作りて、五乗をして齊しく入らしむることを致す」とあるに就き、更に懇切に教示せられたものである。性相といふは、心と諸法との關係を論じて、一切諸法は、皆心より顯現したるものと爲すを相宗といひ、又眞如法性と一切諸法との關係を論じて、一切諸法は、皆眞如法性の顯現なりと談ずるを性宗といひ、これを總稱して性相といふのである。此の性相の道理から論すれば、阿彌陀如來は報佛であり、其の淨土は報土である。即ち無漏清淨の願行を以て成就せられた報佛報土であるから、三賢十聖の修行功を重ねた人々でなければ、其の果報を同じくすることは出来ない筈である。二乗小聖の淺智では、想ひをかくるさへ潜越である、況んや垢障の凡夫として、彼の土に往

生を得るといふことは、全くいはれなきこととなる。なるほど、凡夫二乗、三賢十聖、その法を論ずれば、それ／＼階級があり、區別がありて、まことに其の通りであるが、其の人をいへば、何等の階級なく、何等の區別なく、共に報佛報土へ入る資格のないものばかりで、たゞ彼の佛の願力に乗託するから、五乗を齊しく往生せしめたまふのである。

凡夫の往生といふことに、疑ひをいだく者も、必ずしも彌陀超世の願力に、さることあらじとうたがひたてまつるではないが、前に申す性相の道理を一應わきまへ知りて、我が身の分限を卑下し、かくて真宗の教へを慊らなく思ふものもある。けれども、これは極めて少數で、其の多くは、たゞ漠然と性相の道理を耳にし、垢障の凡夫、罪惡深重のまゝにて、報土に往生するといふことは、

凡夫の往生を疑ふ考への根據。

あり得べからざることゝし、全く自身を顧す、我が身の一大事に警覺するところはなくして、いたづらに法の善惡をのみ比較し、是非をあげつらふ者ばかりである。これ等は無明に癡惑せられたる者、即ち深き反省をしたことのない者、かつは明師の教示に、心耳を傾けたことのない者であるといふが、覺如上人の論さるゝ趣意である。

衣食住を衛生的に簡易にすることの、頗る美事であることは、いふまでもないことである。それで此の種の宣傳は、殆んど都鄙一般に普及して、富豪とか智識階級とか、いつたやうな人々により、時折いろ／＼な會合が設けられて、それ／＼範を示して居らるゝことである。乃ちそれ等會合の日時には、特に綿服をまとひ、輕便な辨當或は膳部を調へて、所謂簡易な衣食の會合を終り、自

批評し教ふ態度について。

宅に歸らるゝと、直ちに日常の絹布に着更へ、食膳毎時佳肴に飽かるゝといつたやうな、滑稽なる矛盾が、眞面目に行はれて居るやうである。簡易生活、まことに結構なことである。けれども、それが範を人に示す爲め、人に教ふる爲めの一時の芝居で、すこしも自分の日常が簡易生活にはなつて居らず、而して我れこそ範を世の人に示した先覺者である、蓋し簡易生活これより廣く行はれんと、得意になつて居る人の多いのは、誠におめでたいことである。

善惡のこと亦實に然りで、他を批評し、或は人に教ふる爲めばかりで、すこしも自分の實際とはなつて居ない。若しも自ら善いことをした、我は善人だと思ふやうなことがあつたならば、危険これより甚だしきはない。蓮如上人『御一代聞書』に「みな人ごとに、よきことをいひもし、働きもすることあれば、眞

俗ともに、それをわがよきものにはやなりて、その心にて、御恩といふことはうちわすれて、わがこゝろ本になるによりて、冥加につきて、世間佛法ともに悪き心が必ずく出来するなり、一大事なり」と警誡せられてある。他人の美事善行を推讃し、旌表するといふことも、殆んど同様に危険なことで、後の始末に迷惑して居るといふ事實は、世間に多いことである。

例を戦争と平和に取りても同じことで、戦争は悪いこと、平和は善いことにきまつて居る。それで非戦を論じ、平和を主張する人はおほいが、眞に平和の人は無く、皆鬪争堅固の人ばかりである。『大朝』紙の元旦繪附録に、裸體の乙女が、左手を獅子の頸にかけ、右手に花輪でつないだ羊を引き、其のうしろより狼、虎、熊、鹿といふやうな猛獸が、をどなくお供をして居る有様を畫

いてある。これが所謂平和といふものであらう。平和會議、軍備制限を論ずる真相は、まことに斯くの如きものならん、頗る皮肉に感じたことである。平和を論ずる人々は、猛獸にも劣らぬ鬭争性の人ばかりであるのである。

善いこと、悪いこと、即ち善法と悪法を上下に積み重ねて見るならば、悪法は底下に布かれ、善法は上部に飾らるゝ。それで、悪いものをも捨てない人ならば、善いものはなほ更大切と取り扱はるゝこと勿論である。かくの如く、世の中に善法と悪法はある。けれども、善人と悪人との區別はない。皆一様に猛獸にも勝れる鬭争性の人々が、吾れこそ平和の神なりといはんばかりに、非戦を論じ平和を主張して居る如く、すべて煩惱を具足せる凡夫でありながら、自ら善人がほし、先覺者を氣取つて居るものばかりである。此の自稱善人、氣

取り屋の善行者と、赤裸々に自己内面の醜態に目覺めたる人とを、假りに上下に積み重ねて見るならば、果して如何なる順序となるであらうか。厚顔無恥なる輕薄漢は、とても表に出られた柄でなく、内觀自省の謙虛なるつみ人こそ、本願他力の最前線に整列せらるゝ人々なれ。しかるを世の人つねにいはいはく、悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をやと。この條、一旦そのいはれあるにいたれども、本願他力の意趣にそむけり。……よて善人だに往生す、まして悪人はとおほせさふらひきと云云。「再唱三唱、無限の法悦を覺えずには居られないことである。

二、自力と他力

世の人々の爲す事柄に、善い事、悪い事の區別はあるが、それを爲す人々に善人悪人の區別はないこと、前來申し述べた通りである。然るに善い事柄に屬することを爲した人々の中には、それを直に自分が善人であるから、かくの如き善い事を爲したと思ひ、若しくは、かくの如き善い事を爲したから、これ自分も善人になつたと思ふやうな人が多いやうである。何といふ無反省なことであらうか。かくの如きは恰も自分の無した事柄から、自分の姓名、自分の周圍のことが、多少でも新聞や雑誌に出るといふと、それを見、それを讀んで、無上に嬉しがつて居るやうなもので、これを他から眺めたならば、噴飯に堪へない滑稽であり、將た又見るに忍びない醜態である。けれども御當人は頗る得意で、たゞ自分の爲したる事柄のみを眺めて、すこしも自分を反省しないから

無反省な
る人の善
悪の觀念

善い事を爲したと思ふ時ほど、人格は下落し、品性は陋劣になつて居るのである。

口頭や筆端で、教育の事に従ひ、社會の改善を論じ、宗教の信仰を鼓吹するといふやうな事柄も、亦全く同様で、筆舌の上の技巧、即ち出来ばへにのみ夢中になり、教育の効果が顯はれたとか、改善の主義が徹底したとか、多數の人に多大の感動を與へたとか、すべて自分の努力の成果にのみ腐心して、深く自分を省るといふことを忘れて居るものであるから、教育家宗教家といはるゝ人々のいかに、無節操な行ひを爲す人が續出するのである。かくの如く善い事を爲した人が、決して善人でないやうに、悪い事を爲した人が、必ずしも悪人ではない。怨恨骨髓に徹して、忍ぶこと能はざるに至り、遂に人を殺傷したとい

善惡の意
 死線を越えて

ふやうな場合に、兩者日常の性格を比較するならば、加害者よりも、より以上に被害者の方の悪人なるが多い。かゝる場合に、加害者に於ても亦他に危害を加へる前に、猛然反省して、自分の已に殺人鬼となつて居ることに氣付いたならば、刃物を投げて自ら悔恨の涙に咽ふとであらう。されば、外に現はれた行為及び事業は、善惡ともに他の人々の上に意を注ぎ、自分の常は常に内心を省ることを忘れないやうにせねばならぬ。かくするならば、善い事に對しては敬慕となり、奨勵となり、發奮興起せずには居れないこととなる。又悪い事に對しては哀憐となり、自警となり、覺醒せずには居れないこととなる。乃ち善は導きとなり、惡は誡めとなりて、共に自分の爲めの師範となるのである。賀川豊彦氏の『死線を越えて』の中に、次のやうな事柄が書かれてある。

その日の朝榮一は、保險會社に出て居た。すると、十時過ぎに、内山の使ひとして、植木が保險會社へやつて來た。そして

「柴田が、お父さんのところへ歸るので、早く歸つて來て下さい」とだけいつて歸つてしまつた。

榮一には、その意味が充分わからなかつた。お父さんのところへ歸る？。東出町の義理の父の處へ歸るといふのか知ら……あまり我等の手では、充分世話が出来ないと云ふので……それであれば、實に殘念なことである。然し、若しあの身體で歩いて歸るとすれば、途中で倒れるにきまつて居る。可哀相に、僕等の親切がわからずに、彼は遂に死を犯しても、義理の父の處へ歸らうといふのだな……あしこへ歸つても、あの權藏部屋では、とても誰

れも願かへりみてくれるものはあるまい。
 こんなに考かかへながら榮一いちは、貧民窟ひんみんくつへ歸かへつて見ると、内山うちやまが路次ろじに立たつて居ゐる。

「先生せんせい、柴田しばたはどうくお父おとうさんの處ところへ歸かへりました」

「エ、お父おとうさんの處ところへ歸かへつた。東出町とうでまちの……」

「いゝえ、天てんのお父おとう様の處ところへです……柴田しばたはほんとに安心あんしんして歸かへつて行いきました。くれぐれも先生せんせいによろしくと申まをしまして、最後さいごに「内山うちやまさん、私わたしは之これから天てんのお父おとうさんの處ところへ歸かへらして貰もらひます」というて、眠ねむるやうに歸かへつて行いきました」

それを聞いて榮一いちは、はらくと涙なみだを流ながした。榮一いちは深く考かかへた「何故なにゆゑ自分じぶんに

内山うちやまと柴田しばただけの信仰しんかうが無いのだらうか。自分じぶんは天國てんごくへ行いくとは考かかへて居ゐたが、今いまの今迄いままで、天てんの父ちちの所ところへ歸かへるとは考かかへつかなかつたのだ。理窟りくつも何なにもない。内山うちやまと柴田しばたには、死しは父ちちの家いえへ歸かへることであるのだ。まあ何なんといふ深い信しん仰かうと徹底てつていであらう。あゝさうであつた、柴田しばたが私わたしに先立さきだつて、天てんの父ちちの懷ふところに歸かへつて行いつたのだ。放蕩ほうたう息子むすこが、父ちちの懷ふところに歸かへつたやうに、勝利しょうりの足踏あしふみを以もつて彼かれは歸かへつて行いつた。

内山うちやまといふのは、眼病がんびょうで疥癬ひぜんかきの、五十歳ごじゅうさいの中老ちゆうらうであり、所謂いはず「お父おとうさんの處ところへ歸かへつた」柴田しばたといふのは、長ながく腸結核ちようけつかくをわづらつて居ゐつた、二十八歳にじゅうはちさいの若わか者ものである。これ等の者ものと同居どうきよして、多おほくの貧民ひんみんの友ともとなつて居ゐる榮一いちの生活せいかうには、誠まことに昔むかしの聖者せいじやを偲しのばしむるほどの尊たかさがある。がしかし、かゝる聖行せいかうも、

自分でそれを尊たぶることゝ意識いしきして「あまり我等われらの手てでは、充分じゅうぶん世話せわが出来できないといふので……僕等ぼくらの親切しんせつがわからずに……」と思おもふやうでは、行爲かうゐは慈善じぜんの聖行せいかうであつても、心こころでは病者びやうしや貧者ひんしやを咎とがめて居をつて、共に道みちを樂たのしむ生活せいかうとはなつて居をらぬ。これでは「放蕩ほうとう息子しこが父ちちの懷ふところに歸かへつたやうな……内山うちやまと柴田しばたとが、父ちちの處ところへ歸かへると信しんじて居をるやうな」徹底てつていした深い信仰しんかうは味あじはれない。すなはち、自分じぶんは聖者せいしやにも恥はぢない正ただしい生活せいかうをして居をる。天國てんごくの門かどは、かゝる正義せいぎの者ものの爲ために開ひらかれるものだ、自分じぶん獨ひとりで思おもひ定さだめて居をるのでは、とても「お父おとうさんの處ところへ歸かへる」といふやうな、懷なつかしい信念しんねんの湧わき出いでらるゝものではない。「自分じぶんは天國てんごくへ行ゆくとは考かんがへて居をたが、今いまの今迄いままで、天てんの父ちちの所ところへ歸かへるとは考かんがへ無なかつたのだ」とある榮一えいいちの告白こくはくには、誠まことに痛烈つうれつな響ひびきを感じかんじたことであ

る。

自力じりき作善さくぜんのひとは、ひとへに他力たうりきをたのむこゝろがけたるあひだ、彌陀みだの本願ほんねんにあらず(本願ほんねんを起おこしたまへる意趣いしゆにかなはない)……自力じりき作善さくぜんの人ひととは、自分じぶんで爲なしたる善よい事ことを眺ながめて、これだけ出来できた、これで善よしと思おもひ定さだめ、すこしも自分じぶんを省かへりみない人ひとであるから、どうしても他人たにんを信しん頼らいし、他たの力ちからに感かん激げきするといふ心こころが起おこらない。けれど、一旦たんぱか深く反省はんせいして、その忌いまはしい自力じりきをたのむ心こころ、自負じふ心しん、うぬぼれの心こころに氣きがついて見みると、今いままで自分じぶんの爲なしたる善よい事ことと思おもうて居をつたことが、悉ことごとく皆他みなたの力ちからによつて出来できたのであつた事がわかり、若もしも他たの力ちからを除のぞき、全まづく他人たにんより分ぶん離りして、自分じぶんの能力のうりきを考かんがへて見みるならば、殆ほとんど鏗びた一文もんの價か値ちもないといふ自覺じかくが起おこり、茲こゝに始はじめて他力たうりきに

感激した行爲があらはれて來るのである。そこで次に「しかれども、自力の心をひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり」と仰せられてある。

蓮如上人「御一代聞書」にも、この自力他力のむねを懇ろに論されて「自力の念佛といふは、念佛おほくまうして、佛にまゐらせ、このまうしたる功德にて佛のたすけ給はんするやうに、おもうてとなふるなり。他力といふは、彌陀をたのむ一念のおこるとき、やがて御たすけにあづかるなり、そのち念佛まうすは、御たすけありたる、ありがたさくと思ふころをよろこびて、南無阿彌陀佛くと申すばかりなり」といはれてある。念佛を多く申して佛にまゐらせ、この申したる功德にて、佛のたすけ給はんするやうに思うて稱ふるとは、

百遍千遍、稱へた積數を眺めて、これだけ稱へた、これで善しと、願力成就の南無阿彌陀佛を我物顔に振舞ひ、これを佛にまゐらせて、其の代償として、佛の御たすけを強請することである。何といふ僭越な恐れ多い所行であらうか。南無阿彌陀佛の名號は吾等に努力して稱へしめんが爲めに出來たのではなく、吾等をたすけんと思召し給ふ如來の本願力、他力の結晶である。それゆゑに、南無阿彌陀佛の不思議力にて、吾等をたすけ給ふことよと、彌陀をたのむ一念のおこるとき、やがて御たすけにあづかるのである。そのち御たすけありたるありがたさく、よろこび思ひ奉りて、南無阿彌陀佛くと稱ふるを、他力の念佛、他力催促の不行と申すのである。自力の念佛で往生を願ふ人々は、數を限り、時間を限りて、稱名念佛するの

であるから、所謂時間勤務で、午前午後とか、晝と夜とか、人々交替に、佛前で木魚を叩き、念佛相續して居らるゝが、時間外、勤務の餘暇、即ち佛前で念佛勤行を終り、各自の人間生活に移つてからは、稱名念佛など、をくびにも出ないやうである。然るに南無阿彌陀佛の不思議力にて、御たすけにあづかることよと、仰ぎ信する一念の時、往生一定、御たすけ治定と心得て居る、親鸞聖人一流の人々は、往生の爲め、御たすけを願ふためにとて、時間を限り、人々交替して念佛勤行を勵むといふことはなく、御同朋御同行、すべての人々一様に、晝夜朝暮、常は各自の人間生活を續けて居るのであるが、時と處を限定しないかわりに、如何なる時、如何なる處、如何なる出來事をも縁として、大悲攝護の光榮を慶ぶ稱名念佛の聲が、心の底から滾々として、不斷にあらはれ出

づるのである。時間を限り、自力で勵む心には、時間外といふ大なる陷穽があり、曩の勤行を徒勞にして、身は何時しか六賊の擒となつてしまふ。皆人毎によきことをいひもし、働きもすることあれば、眞俗ともに、それをわがよき者にはやなりて、その心にて、御恩といふことは、うちわすれて、わがこゝろ本になるによりて、冥加につきて、世間佛法ともに、悪き心が必ずく出來するなり。一大事なり——蓮如上人『御一代聞書』——「怖るべきは自力の心である然るに他力をたのむ心には、時處諸縁の簡びなく、隨時隨處、何事を爲しても佛恩の中の生活であるから「萬事に付いて、よき事を思ひ付るは御恩なり、悪しきことだに思ひ捨てたるは御恩なり、捨つるも取るも、何れもく御恩なり——同上——」で、感激の外に何物もないのである。

仰誓師の『妙好人傳』に出て居つたと記憶する。三十餘年といふ長い歲月、佛祖に御奉公をもし、說法職聞にも、隨分意を注いで居つた妙好人があつた。然るにどうしても明信佛智といふ眞實の領解に達しない。そこでつくづく考へた日ごろ無宿善の者は信を得難いと承はつて居る、自分の如きが、正しく其の無宿善の者であらう。佛法に心がけてより茲に三十年、出来るだけの御奉公もし、不足のないほど聽聞もして居る、これで信心が得られなければ、もはや取るべき道はない。いよく無宿善で、如來の御力にもあまつたものならば、仕方がない、斷念しやう、寺にも出入りすまい、御内佛をも他人に譲らうと決心した。かくて先づ寺の本堂に暇乞ひし、住持にも別れを告げ、いよく明日は御内佛をも他人に譲る、今晚がお別れだといふ思ひで、佛前で勤行をし、念佛

相續して夜を更した。よほど深更に及びしころ、うつらくまごろみしに、あゝら不思議、御厨子の中に奉安せる佛像が歩み下られ、彼れの兩手をしつかと握り、御身はこれまで三十餘年、聽聞に心がけたけれども得られないから、我れを捨つると心を定めたやうであるが、我れの御身を待つことは、二十年や三十年のことでは無い、久遠の古から今日今時まで、晝夜朝暮つねに忘れたことは無い。よしや御身が我れを捨てんとせらるゝとも、我れはいかで、未來永劫御身の心の開けるまで、此の手を離すことで無いと、力をこめて、兩手を握りしめられたと思ふほどに、夢より覺めた。さては我が力にて信するに非ず、信するころも、念する心も、皆彌陀如來の本願力、他力より催さしめ給ふところにてありけりと、芽出度く大悲光中の人となられたといふことである。

三十餘年の長い間、御奉公もした、聽聞もしたと、自分の功を誇る心では、何日までたつても、日々如來に背いた、反對の方向に進むばかりであるが、一たび己れを忘れて、如來の御手に觸れて見れば、久遠劫來、已に〳〵大悲深重の御擁護を蒙つて居つたことに目覺めて來る。自力作善のひとはひとへに、他力をたのむこゝろかげたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報士の往生をとぐるなり」との仰せ、心をどゞめて咀嚼せねばならないことである。

三、惡人と他力

親鸞聖人の『和讃』に「煩惱具足と信知して、本願力に乗すれば、すなはち穢身

すてはてゝ、法性常樂證せしむ」とある。煩惱具足と信知するといふは、自己の罪惡深重なるを自覺すること。本願力に乗るとは、如來願力の救済を信ずること。重い荷物を持つてゐるものが、船に乗りて航海するやうに、煩惱具足の吾等を、このまゝ、攝受したまふ大悲の願力に乗托する、絶對他力の信仰を述べられたのである。これは觀無量壽經に、至誠心、深心、廻向發願心といふ三心を説かれてある、その中の深心を、善導大師『散善義』に精しく釋して「深心といふは、即ち是れ深く信ずるの心なり、亦二種あり、一には決定して深く、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し、常に流轉して、出離の縁あること無しと信ず。二には決定して深く、彼の阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受したまふ、疑ひなく、慮り無く、彼の願力に乗じて、定めて往生

を得と信ず」といはれてある。此の二種深心の釋意を簡短に和述せられたものである。二種と分けられたのは、自身の罪惡を自覺する、これを機の深信といふ、如來の救済に全托する、これを法の深信といふ、即ち機(吾等)、法(如來)の二種であるが、二種の深信といつても、信仰が二つあるのではない、此の罪惡深重の吾等が、如來の願力に救済せらるゝといふ、唯一絶對の信仰である。今「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるゝことあるべからざるを、あわれみたまひて、願をおこしたまふ」とあるのも、亦まさしく此の二種深信のこゝろである。即ち自身は現に是れ罪惡生死の凡夫とあるを、今は煩惱具足のわれらといはれ、出離の縁あること無しとあるを、いづれの行にても、生死をはなるゝことあるべからずといはれた。更に又、彼の阿彌陀

佛の四十八願は、衆生を攝受したまふとあるを、今はあわれみたまひて願をおこしたまふといはれたものである。いづれの行にても、生死を離るゝことの出來ない、われと出離の道たへたる者をあわれみたまひて、深重の大悲やむことなく、茲に救済の誓願をおこされたのであるから、願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なりと仰せらるゝのである。他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なりとは、惡人の他力をたのみたてまつることが、往生の正因なりといふことで、善導大師の「疑ひなく、慮り無く、彼の願力に乗じて、定めて往生を得と信ず」と仰せられたるを、更に痛切に申されたものである。覺如上人の『拾遺古德傳』に惡人往生の實歴を、次のやうに記されてある。

攝津の國、幣島に、年來すみはんべる一人のおとこあり、世のひとなづけて耳四郎とぞいひける、天性もとより、かたましくして、またするわざもなくたゞ鼻悪をのみこととして、世をわたるなかだちとす。あるとき聖人(法然)白河の房(姉小路白河)にあり、二階房と號す、信空上人の宿房なり)にて、よもすがら法談あり。くだんの耳四郎、みやこにのぼりて、どころくためらひありくに、便宜よかりければ、かの貴房にいたりぬ。縁の下にはひかくれて、ひとのしづまるほどを、まちけるほどに、聖人の御房、いつものことなれば、凡夫出離の要道、淨土の一門、念佛の一行にしくはなし。その機をいへば、十惡五逆、四重謗法闍提、破戒破見等の罪人、その行を論ずれば、十聲一聲、いかなる嬰兒もとなへつべし、その信をいへば、また一念十念、いかなる愚者もおこ

しつべし、もとより十方衆生のためなれば、いづれの機かもれ、たれのともがらかすてられん、十方衆生のなかには、有智無智、有罪無罪、凡夫聖人、持戒破戒、若男若女、老少、善惡の人、乃至三寶滅盡のときの機まで、みなこもれり、たゞこの本願にあひ、南無阿彌陀佛といへる名號をきゝえてんもの、若不生者のちかひのゆへに、彌陀如來、遍照の光明をもて、これを攝取してすてたまはず、罪おもく、障りふかく、心くらく、解すくなからんにつきても、いよ／＼佛の本願をあふぐべし。そのゆへは、彌陀の本誓はもと、凡夫のためにして、聖人のためにあらずといへる文によりてなり、あふぐべし、信すべしなんど、さまざま易往易行の道理、他力引接の文證、みゝちかに、こゝろ急やすくのたまふに、耳四郎さらにいづれのわざもわすれて、みゝをそばだてゝ聽聞す

こゝろにおもふやう、これほどに、わがためみよりに、たふときことはんべ
 らず、かゝるところに、おもひよりけるも、しかるべくて、後生たすかるべき
 にて、佛の御をしへにもはんべらん、たいいま、はひいで、かつはおもひき
 ざしつる意趣をも懺し、かつはなをもよくたふときことをも、とひたてまつら
 んとおもひつゝ、夜もあけにければ、やをらむなくはひいで、庭上に蹲居す
 御弟子達あやしみて、緯のよしをどふ。耳四郎しかくどありのまゝにまうし
 ければ、聖人いであひたまひて、宿縁もともありがたしとて、罪惡重障の凡夫
 の出離、ことに彌陀難思の願力によらずんばかなひがたしとて、手をとりて慇
 懃にとききかせたまふ。耳四郎いよくよろこびをなして退出す。

そののち、ふたごゝろなく念佛す。されども生得の報なれば、ひごろのわざ

すつることもなし、たゞたのむところは、かゝる惡業はげしき身なりとも、念
 佛せば、彌陀如來の大慈大悲の、因位の誓約をたがへず、むかへたまふぞとき
 々し、聖人の御ことばばかりなり。かくて年月をふる、あるときかたへの男、
 耳四郎が惡事に長じたるをや、そねみおもひけん、なをちかくむつびける朋達
 をかたらひえて、耳四郎を害せんとたくむ、酒をくみ、盃をめぐらしてしひ
 ければ、耳四郎沈酔して、物をひきかつぎ、先後をわきまへず臥しにけり、そ
 のとき、敵かたなをぬきつゝ、うへにかつぎたるものを、ひきのけてみるに、
 耳四郎にはあらで、またく金色の佛體なり、しかのみならず、出入のいきのこ
 え、すなはち南無阿彌陀佛くときこゆ、こゝに敵、奇異のおもひに住して、
 まづ劔をおさめて、つらくこれを案ずるに、年來のあひだ、行住坐臥、時處

諸縁をきはらず、念佛しつるゆへに、この相現するにこそと、いみじく、たふとくおぼえて、随喜のおもひ、をきどころなきあまり、しばしこれをおどろかす。耳四郎こえにつき、睡眠たちまちおどろき、酩酊惺悟す、そのとき敵の男いふやう、なにをかかくしきこえん、しかく、なにがしのぬしが、かたらひはんべりつれば、はかなくぞ、うしなひたてまつらんと、はかりつるに、そのすがた、金色の佛像とあらはれ、そのいきの呼吸、しかしながら、念佛のこえときこえつれば、耳もあやに、目もめづらかにおぼえて、かつは謝し、かつはたふとまんがために、左右なくおどろかしつるなり、われもとより、汝にむかひて遺恨なし、たゞをろかに、かたらひをみつるばかりなり、さらにいきごをりおもふことなしとて、慚謝のあまり、やがて髻をきりてみせけり。これ

をきくに、いよく信力强盛におぼえて、耳四郎も、もどりをきりてけり、二人ころざしを一にして、かたはらに庵しめつゝ、しづかに念佛して、つゝに素懐をどげにけり。

耳四郎は山賊、海賊、強盗、窃盗、放火、殺害、かくの如きの悪行を以て、朝夕の能とし、妻子をたすくるさへとして居つたとある。かくの如き極重の悪人が、ゆくりなくも、白河の房の縁の下に隠れ居て、彌陀の本誓は、もど凡夫のためにして、聖人のためにあらず、されば罪おもく、障ふかきものほど、いよく佛の本願を仰ぐべしといふ、法然上人の慈誨に接して、場所も場所、時も時、かゝる所におもひよりけるも、しかしながら如来の大悲心よりなさしめたまふところなりけりと、やをら庭上にはひ出で、親しく聖人にあひたて

極重惡人の意味

まつり、罪惡重障の凡夫、ことに彌陀難思の願力によるべきことを、信受することが出来たのであつた。耳四郎は極重の惡人である、而して彌陀の本願は、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんが爲めの願にてまします。されば、耳四郎の如き惡人にして、始めて彌陀の本願にたすけられまいらするのであらうか。抑亦極重の惡人とは、獨り耳四郎の如きものばかりであらうか。『拾遺古德傳』に、更に次のやうにいはれてある。

この耳四郎は、至極の罪人、惡機の手本といひつべし。今時の道俗だれのごもがらか、これにかはるところあらんや。をよその身にをいて、うちに三毒をたへ、ほかに十惡を行す、つくるに強弱ありといへども、一切ことごとくそれ妄惡なり、しかれば、たれのともがらか、罪惡生死の名をのがれん、いづれ

妄念は吾等の自體

の類か、煩惱成就の體にあらざらん、つくるも、つくらざるも、みな罪體なりおもふも、おもはざるも、ことごとく妄念なり。しかるに當世のひとみなおもはく、わが身にさほどの罪業なければ、本願にはすくはれなん、わが心にさほどの妄念なければ、往生の願ははたしつべしと。このおもひ、しかるべからず、そのゆへは、たとひ身心ともに、起惡造罪なくとも、念佛をたのますば、極樂に生じがたし。たとひ逆謗闡提なりとも、願力に乗せば、往生うたがひなし。罪業の有無によるべからず、本願の信不信にあるべきなり。吾等は煩惱具足の凡夫である、妄念は吾等の自體である。つくるもつくらざるも、皆罪體であり、おもふも、おもはざるも、ことごとく妄念である。よしや、つくるに強弱あり、をかすに淺深はあつても、同じく罪惡生死の凡夫たる

にかわりは無ない。往ゆき往ゆきて、洋やう々たる大海だいかいの濱はま邊べに出いで、は、負おへる荷物にものの多おほきも、少すくきも、年とし老おひたるも、幼こきも、游いう泳いのすべ心こころ得えたるも、心こころ得えざるも、さては強まさ者しや、弱じやく者しや、男だん子し、婦ふ人じんのすべの者もの、同おなじく彼岸ひがんに達たつするの望のぞみなく、能力のうりきなきにかわりは無ない。浮ふ沈ちんの分わかるゝところは、かゝりて船ふねに乗のると乗のらざるとにある。吾等われら目今めこん、永劫えうこくの旅りよてい程あに在あることを自覺じかくするならば、正まさに是これ大たい洋やうを望のぞみて茫然ぼうぜん自失じしつせるもの、如來にょらいの願くわん船せんいまさすば、苦海くかいをいかでかわたるべき、迷悟めいご昇沈しやうちんの分わかるゝところ、かゝりて本願ほんくわんを信しんずると信しんせざるとにあるのである。

されば、願くわんをおこしたまふ本意ほんい、惡人成佛あくじんじやくぶつのためなればとあるは、他たに善人ぜんじんといふものがあつて、特とくに惡人あくじんの爲ためめと仰あやせられたのでは無ない、すべてが煩惱ぼんなん

具足ぐそくの凡夫ぼんぷで、いづれの行ぎやうにても、生しやう死じを離はなるゝこと能あたはざる者ものばかりである。それゆへに、惡人成佛あくじんじやくぶつの爲ためめにおこしたまへる本願ほんくわんが、即すなはち十方衆生じふじやうじゆうの爲ためめにおこしたまへる本願ほんくわんである。而しかも、善人ぜんじんだに往生わうじやうす、まして惡人あくじんはとおほせられたものである。自體煩惱具足じたいぼんなんぐそくの凡夫ぼんぷでありながら、外ほかに賢善精進けんぜんしやうじんの相さうを現げんじて、善人顔ぜんじんがほして居ゐる者の多おほい世よの中なかである。かくの如ごとく己おのれを欺あやまし、人ひとを欺あやまして、自みづから善人氣取りぜんじんきとりて居ゐるところの、あさましい者の爲ためめにも、尙なほ且かつつ假令けりやうの誓願せいぐわんをおこしたまへるが、如來にょらいの大慈悲だいじひである。よつて善人ぜんじんだに往生わうじやうす、まして惡人あくじんはとおほせられたものである。

第四章

一 慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり。しかれども、おもふがごとく、たすけとぐることに、きはめてありがたし。

また淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく、衆生を利益するをいふべきなり。

今生に、いかにいとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念佛まふすのみ

ぞ、すえとをりたる、大慈悲心にてさふらうべきと云々。

前章に於て、世の中に善法と悪法との別はある。けれども、善人と悪人との區別はないそのゆゑは、善いことをした時に、自分は善い事をした、自分は善人であると思ふ者ほど、唾棄すべき醜惡なる者はない、かゝる善人顔せる悪人だに、如來の大慈は捨つるに忍びさせられないのである。されば、他力をたのみたてまつりて、如實に自己の罪惡に目ざめたる悪人は、正しく如來本願の對機たる光榮を有するものでなければならぬ。これが「善人なをもて往生をぞぐいはんや悪人をや」と仰せられた、親鸞聖人の思召であらうと申して置いた。今この第四章に於いては、其の善法を如實に修行し得る善人の、有り得べからざる事實を、「慈悲」といふ一つの善法に就いて、示されたものと伺ひたいので

佛教に於ける慈悲の意義

ある。

慈悲とは、佛教を總標したる詞である。佛教とは何ぞやといへば、慈悲の教へであるを申さねばならないことである。そのゆゑは慈悲は佛の心のすべてであるからである。「觀無量壽經」に言く「佛心とは、大慈悲是れなり、無縁の慈を以て、諸の衆生を攝したまふ」と。此の佛心を、現實生活の上に學ばんと勵むが、聖道門の自力の修行であり、此の佛心に攝取せられて、慈光攝護の下に、感謝の生活を營むが、他力往生の淨土門である。がしかし其の聖道門たるは、淨土門たるを問はず、苟くも佛教の教徒たり、信徒たる者は、この佛心を體して世に處するの覺悟を忘れてはならぬ。即ち日常處世の中心を、この大慈悲心に安住せしめねばならないことである。善導大師は、これを稱して「學佛

慈悲とは如何なる心か

智慧

大悲心」といつて居らるゝ。たゞ肝要は、如何にすることが、果して佛の大悲心に隨順したる、如實の生活であるかといふ點に在るのである。

慈悲とは如何なる心かといへば「無縁の慈を以て、諸の衆生を攝したまふ」佛の心であることは、前記の經說に明かなるところであるが、其の大慈悲心は如何なる心より起り、又如何して一切衆生を攝取したまふかといふに、曇鸞大師は、これを智慧、慈悲、方便といふ三つに分けて明かにせられてある。智慧が佛の證りであり、其の智慧を以て、一切衆生を觀そなはしたまへるが、慈悲であり、而して衆生を濟度したまふ實行が、方便である。先づ智慧とは如何なる心かといふに

進むを知つて、退くを守るを智といふ。空無我を知るを慧といふ。

智に依るが故に、自らの樂を求めず。慧に依るが故に、我心をもて自身に貪着すことを遠離せり。

といはれてある。自らの樂を求むるは退没であり、自身に貪着するは我執である。進み進んで無我の究竟に達したるが、佛の證れる智慧である。次に慈悲とは如何なる心かといへば

苦を抜くを慈と曰ひ、樂を與ふるを悲と曰ふ。

慈に依るが故に、一切衆生の苦を抜く。悲に依るが故に、衆生を安んずること無き心を遠離せり。

といはれてある。火宅に懊惱せる衆生を視ては、其の中の一人と雖も、捨て、置くことは出来ない、すべての衆生を苦しみより濟くひ、すべての衆生に樂を

與ふ、これが佛の慈悲である。第三に方便とは如何なる心かといふに

正直を方といふ。己れを外にするを便といふ。

正直に依るが故に、一切衆生を憐愍する心を生ず。己れを外にするに依るが故に、自身を供養し恭敬する心を遠離せり。

といはれてある。己れを外にして、視聽言動、身心の活動すべてを擧げて、一切衆生の爲にしたまふ、これを佛の方便といふのである。已上慈悲を中心として、智慧はその根柢であり、方便は其の實動である。而して其のすべてが、寸毫も自己を顧るの念慮を起す無く、偏に一切衆生の苦惱を除き、大安慰を得しむる爲にのみ働きたまふ、これを大慈悲といふのである。

然るに自力聖道門の修行に於ては、最初大菩提の心を發してより、六度四攝

等の勇猛の勤行、しかしながら一として自己の菩提の爲めならざるは無い、即ち利他の慈悲行を勵みても、それを悉く自己の進道の資糧と爲すのであるから、其の動機も、其の目的も、すべて大慈悲の本義に背いて居るといはねばならぬ。今この章に於て「この慈悲始終なし」といひ「おもふがごとく、たすけとぐるごとく、きはめてありがたし」といはれてゐるのは、蓋しこれが爲めであらうと伺はるゝのである。

そも／＼慈悲とは、佛の心である。この佛の心を體して、慈悲中心の日常を送らんこと、凡夫自身の努力を以て、企て及ぶべきとでなく、またこれほど恐れ多い、僭越の沙汰はないのである。佛の心を體し、佛の大悲心を學ばんには先づ自己の身心を挺して、佛の大慈悲に攝取せられたてまつらねばならぬ。佛

眞實の慈
悲

四章の要
目

の無縁の大慈悲より放ちたまふ光明にて、遍く十方世界を照したまふのであるが、特に念佛の衆生を攝取して捨てたまはずと説かれてある。「しかれば、念佛法をすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふ」といひ「念佛して、いそぎ佛になりて、大慈悲心を以て、おもふがごとく衆生を利益す」といはれてあるのが、正しくこの學佛大悲心の眞實道を示されたものである。即ち佛の大慈悲に攝取せられたてまつれる、最初の一念から、無量永劫、未來際を盡して、佛の大慈悲心と一體になるのであるから、他力淨土門の慈悲を以て、すえとをりたる、眞實の慈悲と申されたこと、伺はるゝ。

已上が第四章の大意であるが、更に(一)聖道と淨土、(二)自力に慈悲なし、(三)一貫せる大慈悲の三項に分ちて、此の章の意味を咀嚼して見たいと思ふ。

一、聖道と浄土

慈悲に聖道浄土のかはりめありと仰せらる、先づ聖道浄土といふことから伺はねばならぬ。これは道綽禪師の『安樂集』に二種の勝法と申されて、門八萬に餘れりとある數多き佛教を、一には謂く聖道、二には謂く往生浄土といふ、二大別にせられた、古今獨歩の明判である。但し道綽禪師が、突然かゝる判釋を創唱せられたのでは無く、その源は、龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』に於ける、難行道易行道といふ、二道の教へから起つて居るのである。世間の道にも難と易とがある、陸路長途を跋涉するは、頗る艱難であるが、水道を船に乗りて航行するは、誠に愉快であるやうに、其の門無量なる佛法の中には、苦修練行に勇

聖浄二門
判の起源

猛精進せねばならぬ難行もあれば、信するばかりで達することの出来る易行もある。其の難行とは、六度萬行を修することであり、易行とは阿彌陀佛の本願を信することであるといふのが、龍樹菩薩の難易二道の判意であつた。これを曇鸞大師の『往生論註』に祖述して、難行道とは、五濁の世、無佛の時、自力で修行するから成就し難いのである。易行道とは、阿彌陀佛の本願を信すれば、佛の願力、即ち他力に乗じて、彼の浄土に往生を得しめたまふのであるから、行き易く、證り易いといはれてある。即ち自力なるが難行であり、他力に乗ずるから易行であると述成せられたもので、誠に明了なる御釋である。阿彌陀佛の本願力を、他力といふ詞で示されたのは、この曇鸞大師の創唱であつて、親鸞聖人も、特にこれを推讃し感戴して居らるゝことである。以上自力の難行道

は、此の世界に於て發心修行する教へであるから聖道門といひ、他力の易行道は、阿彌陀如來の淨土に往生を願ふ教へであるから往生淨土門といはれた、即ち此の世界で修行する教へと、彼の淨土で證る教へと二つに分けられたのが道綽禪師の大成せられた、聖道淨土二門の教判である。親鸞聖人の『教行信證文類』に、凡そ一代の教に就て、此の界の中に於て、入聖得果するを聖道門と名づけ、難行道と云へり。安養淨刹に於て入聖證果するを淨土門と名づけ、易行道と云へりとあるのが、二門教判の相承を、簡明に示されたものである。

自力の聖道門では、此の世で發心修行して、證りの境地に達しやうとするのであるが、抑も此の世界は、如何なる世界であらうか。世界はこれを約言するに、人と物との二つから成り立ちて居る。物を依報といひ、人を正報と稱する。

自力聖道の意義

住宅先づ在り、而して後に人が出来るのでは無く、人がありて各自に思ひ／＼の住宅を構へて居るのであることは、申すまでもないことである。此の世は廣き住宅であり、それは吾等人間の構成した物である、即ち人が主人であり、物は人に依りて存して居るのであるから、人を正報といひ、物を依報と申すのである。かくの如く吾等人間の、迷妄の業力に依りて出来て居る此の世界には美醜あり、高下あり、利害あり、得失ありて、事々物々、一として吾等を誘惑せざるものは無い。而してこれに對する吾等の六根六識、眼といはず、耳といはず、鼻孔、舌端すべて其の對象に接するや、虎視眈々、奪はざれば飽かぬ本能を發揮せざるはない。かゝる人世に於て、發憤興起、解脱を求めて日夜にあせりもかくとも、蓋し汚水の中にて洗滌につとめ、化粧を凝すが如く、磨けば磨

くほど、いよく穢がれ、ますます醜く、なるばかりで、目的を達成せんことは、遂に望むべくもない。それゆゑに、行を起し、道を修するとも、一人として得る者あらずと説かれてある。

然るに往生浄土門に在りては、阿彌陀如來の願力に乗託して、阿彌陀如來の願力成就の浄土に往生するのであるから、必ず成佛することが出来るのである。そのゆゑは、彼の浄土は、阿彌陀如來の清淨眞實の願行を以て、成就したまへる世界であるから、恰も衆水の海に入りて一味となるやうに、如何なる生死罪濁の凡夫でも、如來の弘誓に乗じて、彼の浄土に往生しねれば、煩惱即菩提、生死即涅槃の大果を、開覺せしめたまふのである。それゆゑに「彼の佛國は即ち是れ畢竟成佛の道路なり」といひ、又「大乘門とは謂く彼の安樂佛國土是れ

往生浄土門の意義

なり」といはれてある。彼の浄土は成佛の道路であるから、彼の浄土に往生すれば、必ず成佛するのである。彼の浄土は大乗門であるから、彼の浄土に往生すれば、必ず大乘の覺りを開くのである。此の世界は、凡夫迷倒の業力を以て成就せるところであるから、事々物々、一として生死流轉の因縁たらざるはない。ゆゑに、此の世界に於ては、迷ふのが當然である。然るに彼の浄土は、阿彌陀如來の清淨眞實なる願行を以て、成就したまへる世界であるから、流るゝ水も、吹く風も、一草一木、悉く佛法ならざるはなく、佛事を爲さるは無い。ゆゑに、彼の浄土に往生すれば、必ず成佛するのである。

聖道と浄土とは、已にかくの如く別であるからして、聖道の慈悲は、きはめてありがたく、浄土の慈悲は、すえとをりたる大慈悲心なりと、仰せられたも

のと伺はるゝ。

二、自力に慈悲なし

自力に慈悲なし

慈悲とは、佛の御心で、佛は三界を以て吾が家と爲し、一切衆生を吾が子と思召して、一念一刹那といへども、吾等を感念したまふ心を、休めたまふことではない、これを稱して大慈大悲と申すことである。吾等が迷倒の心の中に、かゝる慈悲心の有り得られないことは、前に申した通りである。がしかしながら慈悲といふことを、最も狭義に申せば、同情の心、おもひやりの心である。雪の日に、子をつれて来る物貫ひ、哀れと思へ物やらすとも……といはれてあるやうに、弱き者、貧しき者、哀れな者に對しては、人として、一掬同情の涙

慈悲の狭義としての同情

同情の眞實相

を催さないものは無く、おもひやりの心を起さないものは無い、これが人情の最も美なるものとせられてある。更に俳人一茶は「やれうつな、蠅が手をする足をする」「飛ぶなのみ、それ／＼そこが隅田川」といふやうに、最も弱小なる蟲類にまで、同情の涙を注いで居る。誠に奥床しい眞情であつて、かくの如きは、人情自然の發露であるといはれてあるやうに、萬人等しく備へて居るところの美德であるとせられて居る。

同情、おもひやり、これぞ人情の美德であることを、否むものは無い。けれども、更に徹底して吟味するところが無くしてはならぬ。それは、この同情、おもひやりといふものが必ず強者より弱者に對し、上より下をながめ、富める者が貧しき者に向つた場合にのみ、起る心であるといふことである。茲に人あり

風雲に乗じて成功し、帝都に廣大な邸宅を構へて、豪華な生活をして居るとする。或日、郷國より、貧しき一青年訪ね來りて、志あるも、資なきを訴へ、晝間如何なる勞役にも服するゆるゑ、どうか夜學校に通はしては下さるまいかと願つたとする。見れば有爲の青年である、坐ろに同情の心動きて快諾し、爾來數年、保護して勉強したところ、案の如く、成績優良にて業を卒へ、然るべき職に就くことが出來たとする。本人の喜びは言ふまでもなく、保護者も世話甲斐ありたりとて、尙ほ陰に陽に、聲援し指導して居つたが、其の成功や誠に素晴らしく、更に數年の後には、其の地位、其の名聲、遙に保護者の上に出でたりとする。かくて尙ほ且つ曩の同情を以て彼れに對し、彼れを迎ふことが出來るであらうか。かくの如きは、決して世上稀有のことでは無い。必ずや昔し

起つた同情の美德が、今は却て嫉視反目の惡徳となつて現はるゝものである。かくては曩の同情が、果して美德といふべきものなるか、否か、頗る疑問であるといはねばならぬ。

勞資の問題に就て、温情主義が唱へらるれば、勞働者は、非常な反感を以て之れを迎ふる。抑何故であらうか。蓋し強者より弱者に對し、上より下をなぐめ、富める者が貧しい者に向つて、同情を注ぎ、温情を以て待つといふのは、其の名美にして、頗る優しく聞ゆるけれども、其の實は、強者の殘忍性を、遺憾なく暴露して居るものである。なせなれば、所謂強者、富者の心では、彼の貧者、弱者をば、永久に弱き、貧しき地位に置き、彼等に僅かの物資を與へて其の可憐な喜ぶ顔を見て樂しみたいといふのであるから、喻へば虎狼のやうな

猛獸が、兎とか、羊とかいつたやうな弱いものを捕へて、一息に殺すといふこともせず、何時までも弄ぶつて楽しむといふやうなもので、またとない残忍な行爲である。それゆゑに、曾て同情を與へた弱者が、自分を凌いで強者となり、物資を恵みし貧しき者が、自分よりも富める者になつたといふやうな場合には、忽ち嫉視反目して敵對行爲に出づる、蓋し、これが同情といひ、温情といふものゝ假面をぬいた眞實相であるのである。

「聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり。しかれども、おもふがごとく、たすけとぐるること、きはめてありがたし……今生に、いかにいとしをし、不便とおもふとも、存知のごとく、たすけがたければ、この慈悲始終なし。」同情おもひやりの心で爲せる事も、其の假面をぬいで見れば、

吾れながら、身の毛よだつやうな、残忍な行ひを爲して居るのである。迷倒の吾等が、自力のはからひにて爲す行ひに、慈悲同情の有るべき筈がない、大悲は、これ佛の心であることを忘れてはならぬ。

三、一貫せる慈悲

「淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく、衆生を利益するをいふ。……しかれば、念佛まをすのみぞ、すゑとをりたる大慈悲心にてさふらふ」と仰せらるゝ。前にも申したやうに、我等凡夫に慈悲の心は無い、慈悲は佛の心である。されば、佛にならねば慈悲の行ひは出来ない。それゆゑに、淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛に

なりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生利益すると仰せられ、又次の第五章にも「たゞ自力をすて、いそぎさとりをひらきなば六道四生のあひだいづれの業苦しづめりとも神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり」と仰せられてある。これが親鸞聖人の理想の生活であり、往生淨土を唯一の希望とする、すべての念佛者の理想の生活である。しからは、衆生を利益する、慈悲の行ひ、言ひ換ゆれば社會救済といふやうな、當然宗教家の努力すべき範圍に屬したる事業をば、親鸞教徒たる念佛行者は、往生淨土の後、すなはち遠き將來の理想とするばかりで、日常の現實生活の上には、絶対に不可能の事として願ふ事をしてないといふのであらうか。親鸞聖人が、同朋同侶たちへ遣はされた消息の中にも、次のやうに仰せられてある。

悪をこのむひとにも、ちかづきなんとする事は、淨土にまいりてのち、衆生利益にかへりてこそ、さやうの罪人にも、したがひ、ちかづくことはさふらへ、それも、わがはからひにはあらず、彌陀のちかひによりて、御たすけにてこそ、おもふさまのふるまひも、さふらはんすれ、當時はこの身ごものやうにては、いかゞさふらふべかるらんと、おぼえさふらふ。よく／＼案せさせたまふべくさふらふ。

『和讃』に「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ、如來の願船いまさずば、苦海をいかでかわたるべき」と仰せられて、人を益し、世を救ふ前に先づ自分が救はれねばならぬ。彌陀の五劫思惟の願を、よく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」と、深重の大悲に感激して、自己省察の法悦

を述べらるゝが、親鸞聖人の常の仰せである。

されば、自ら意識し、自ら發起して、人を益し、世を救ふなどいふことは親鸞聖人に於ては、思ひも寄らぬ、もつての外、僣越なる事であつて、口にするだに、佛徳を冒瀆する、畏れ多い事として居らるゝのである。すなはち、人を益し、世を救ふといふことは、大慈大悲の如來の行はせらるゝことで、自分には救はるゝ者であり、すでに救はれた者であるといふが、親鸞聖人の法悦である。この救はれたる法悦の生活、すなはち、親鸞聖人の信仰生活は、如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし、師主知識の恩徳も、ほねをくだきても謝すべし」とあつて、佛恩に感激のあまり、粉骨碎身して、世の爲め、人の爲めに、奉仕せらるゝばかりである。粉骨碎身の努力を以て、何をせらるゝ

かと申せば、「他力の信をえんひとば、佛恩報せんためにとて、如來二種の廻向を、十方にひとしくひろむべし」と仰せらるゝ。これを知恩報徳といひ、常行大悲と申して、常に大悲を行つて佛恩を報謝したてまつるのである。

常に大悲を行ふ。大悲は佛の心であり、大悲の行ひは、即ち佛の不行であるそれがどうして、吾等念佛者の知恩報徳の行ひとなるであらうか。親鸞聖人は仰せらるゝ、

無慚無愧のこの身にて

まことのこゝろはなれども

彌陀の廻向の御名なれば

功德は十方にみちたまふ。

吾等の行ひは、すべて彌陀の廻向の御名より現はるゝ行ひである。これを他力催促の大行と申して、行ふは吾等であつても、行はせたまふは如來であるから、如來の行ひが、吾等の行ひであり、吾等の行ひが、そのまゝすべて如來の行ひである。それゆゑに、知恩報徳といふ。純真なる聖行となり、稱して常行大悲とも申さるゝことである。蓮如上人が、この外愛讀せられて「四十餘年が間御覽候へども、御覽じあかすと仰せられ候。又金をほり出す様なる聖教なりと仰せられ候」とある『安心決定鈔』には、次のやうにいはれてある。

念佛三昧にをいて、信心決定せんひとは、身も南無阿彌陀佛、こゝろも南無阿彌陀佛なりとおもふべきなり。ひとの身をば、地水火風の四大よりあひて成す、小乗には、極微の所成といへり。身を極微にくだきてみることも、報佛

の功德の、そまぬところはあつべからず。されば機法一體の、身も南無阿彌陀佛なり。こゝろは煩惱、隨煩惱具足せり、刹那々に生滅す。こゝろを刹那にちはりてみることも、彌陀の願行の遍せぬところなければ機法一體にして、こゝろも南無阿彌陀佛なり。

かくて蓮如上人は、常に南無阿彌陀佛のぬしになるといはれ、南無阿彌陀佛に身をばまるめたるを仰せられ、衣裳とゝのへてまかりいづれば、衣の襟をたゝひて、南無阿彌陀佛よと申され。又疊をたゝひては、南無阿彌陀佛にもたれたる由、仰せられて、行住座臥すべての所爲が、南無阿彌陀佛の中の仕事、如來のなさしめたまふところといふ、感激のこゝろより、世の爲め、人の爲めといふ様な、窮屈なる思慮意識から超越して、絶對無條件の奉仕生活をせられた

救済の自
覺を急務
とす

ことである。

世の爲め、人の爲めといひ、世を救ひ、人を益するといふ前に、すべての人が、先づ自分が救はれねばならない者だと、自覺することを、喫緊の急務とせねばならぬ。かく、自分が救はれねばならぬものだと自覺して、如來の大慈悲に救済せらるゝのがすなはち信仰である。これを如來の大慈悲より申して攝取不捨といひ、救はれたる吾等より申して正定聚といひ、不退轉と申すことである。第一章に「彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばどぐるなりと信じて、念佛まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益に、あづけしめたまふなり」とあり。又蓮如上人の御文章に「如來の誓願を信じて、一念の疑心なきときはいかに地獄へおちんとおもふとも、彌陀

攝取不捨
正定聚、
不退轉

平生業成
現生不退

如來の攝取の光明にをさめとられまいらせたらん身は、わがはからひにて、地獄へもおちずして、極樂にまゐるべき身なるがゆゑなり」とあるのが、この攝取不捨、正定聚、不退轉の光榮に浴したる、法悦を高潮せられたものである。すでに如來の大慈悲に攝取せられたてまつれば「あさなく報佛の功德もちながら起き、ゆふなく彌陀の佛智とともに臥す」とも申されてあつて、朝夕の起き臥しが、全く如來の家庭に生活して居るものである。これが平生業成、現生不退、又は現生正定聚と申すことで、親鸞聖人の宗教の特色である。みなもと『大無量壽經』の本願成就文に即得往生不退轉とあるを、親鸞聖人の『一念多念證文』に「即得往生といふは、即はすなはちといふ、ときをへず、目をもへだてぬなり。また、即はつくといふ。そのくらゐにさだまりつくといふこ

體失往生
不體失往
生

とばなり。得は、うべきことをえたりといふ。眞實信心をうれば、すなはち無礙光佛の御ころのうちに、攝取してすてたまはざるなり。攝取をさめたまふ取はむかへるとまをすなり。をさめとりたまふとき、すなはちとき日をもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとのたまへるなり」といはれてある。往生とは命終りて後のことでは無い、即ち往生を得るのである。即ちとは、時を経ず、日を隔てぬことであり、また即の字はつくといふ、その位にさだまりつくといふことばである。されば、即得往生といふは、攝取不捨の如來の大慈悲を、信心歡喜する一念の時、時を経ず、日を隔てず、正定聚不退轉の位に、つきさだまることである、といふが、親鸞聖人の信仰である。法然上人御在世のむかし、體失往生、不體失往生といふことに就て、諍論のあつた

ことが『口傳鈔』に次のやうに記されてある。

聖人親鸞のたまはく、先師聖人源空の御とき、はかりなき法文諍論のことありき。善信は、念佛往生の機は體失せずして往生をどぐといふ。小坂の善慧房證空は、體失してこそ、往生はどぐれと云々。この相論なり。

こゝに同朋のなかに、勝劣を分別せんがために、あまた大師聖人源空の御前に參じてまうされていはく、善信御房と善慧御房と、法文諍論のことはんべりとして、かみくだんのおもむきを、一一にのべまふさるゝところに、大師聖人源空のおほせにのたまはく、善信房の、體失せずして往生すとたてらるゝ條は、やがてさぞと御證判あり。善慧房の、體失してこそ往生はどぐれとたてらるゝも、またやがてさぞとおほせあり。これによりて、兩方是非わきま

へがたきあひだ、そのむねを、衆中よりかさねてたづねまうすところに、おほにせのたまはく、善慧房の、體失して往生するよしのふるは、諸行往生の機なればなり。善信房の、體失せずして往生するよしまうさるゝは、念佛往生の機なればなり。如來教法、元無二なれども、正爲衆生、機不同なれば、わが根機にまかせて領解する條、宿善の厚薄によるなり。念佛往生は、佛の本願なり、諸行往生は、本願にあらず。念佛往生には、臨終の善惡を沙汰せず至心信樂の歸命の一心、他力よりさだまるとき、即得往生住不退轉の道理を善知識にあうて、聞持する平生のきざみに治定するあひだ、この穢體亡失せずといへども、業事成辨すれば、體失せずして往生すといはるゝ歎。本願の文、あきらかなり、かれをみるべし。諸行往生の機は、臨終を期し、來迎を

まちえずしては、胎生邊地までもむまるべからず。このゆゑに、穢體亡失するるときならでは、その期するところなきによりて、そのむねをのふる歎。第十九の願にみえたり。

かくの如く、親鸞聖人の信仰に於ては、この穢體の有ると無し、すなはち生前、死後といふやうなことは、全く以て問題ではない。「超世の悲願きゝしよりわれらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にすみあそぶ」で、如來の大慈悲に攝取せられた端的から、未來永劫、長へに如來の大慈悲中に生きて行くのである。これが終始一貫、いはゆる「すえとほりたる大慈悲心にてさふらふ」と申さる所以である。

しからば何故に「佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく、衆生を

慈悲行を
來世に期
せらるゝ
所以

利益」すといはれ「いそぎさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり」といひ、又「悪をこのむひとにも、ちかづきなんごすることは、浄土にまゐりてのち、衆生利益にかへりてこそ、さやうの罪人にも、したがひちかづくことはさふらへ」とて、特に命終り、浄土に往生して後の事を期待し、憧憬せらるゝのであらうかといふに、これは、聖人のつねの御述懐に「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ」といひ「無慚無愧のこの身にて、まことのこゝろはなければ」と仰せらるゝやうに、自分で爲し能ふことでなく、また爲さんと思ふ心不起すべきでなく、すべて如來の爲さしめたまふところであるといふことを、絶對的に強く仰せられたものである。それゆへに「浄土にまゐりて、衆生利益にか

へる」といふことに就ても「それもわがはからひにはあらず、彌陀のちかひによりて、御たすけにてこそ、おもふさまのふるまひも、さふらはんすれ」と仰せられて、世のため人の爲めに、盡さねばならぬと、きむのでなく、現世後生を通じ、終始一貫して、如來の大慈悲に感激し、他力自然の御催しにあづかりて、身命を願す、盡さずには居られないのが、親鸞教徒・念佛行者の生き方であるのである。

第五章

一 親鸞は、父母の孝養のためとて、一遍にても、念佛まふしたること、いまださふらはず。

そのゆへは、一切の有情は、みなもて、世々生々の父母兄弟なり。いづれもく、この順次生に、佛になりて、たすけさふらうべきなり。

わがちからにて、はげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻向して、父母をもたすけさふらはめ。

たゞ自力をすて、いそぎさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと云云。

親鸞は、父母の孝養のためとて、一遍にても、念佛まふしたること、いまだ

父母孝養の意義

さふらはす……と仰せらるゝ。ところが、聖人は四歳の御時、父公有範朝臣を亡はれ、八歳の御時、母公も亦亡くなられて、世にも可憐な孤兒となられたのであるから、今「父母の孝養のため」云々と仰せらるゝのは、父母生前の御孝養のことでは無く、次の仰せにもあるやうに「念佛を廻向して、父母をもたすけさふらはめ」といふ。今は亡き父母の冥福をいのりて、孝養をつくさんため、いはゆる追善廻向の爲に、念佛をまふしたことは、一遍も無いと、仰せらるゝのである。

その理由として、父母と念佛との二つにつき、根本的に徹底して、誨へ示し下されたのが、この第五の一章である。先づ父母といふものを、單に生父母母にかぎりて、孝養を云云するのは、甚だ偏僻固陋のさもしい考へで、ほろく

父母とは何ぞ

と、鳴く山鳥の聲きけば、父かぞ思ひ、母かぞ思ふといはれたやうに、すべて生きとして生けるものは、みなもて生々世々の間に於て、父母兄弟といふ親しい契りを結んで来たものである。近く人類ばかりに就て考へても、一切の男子には父として仕へ、一切の女子をば、母として敬せよといふが、釋尊のつねに教へたまひしところである。今生父母を基準として考ふるに、親は所謂兩親で二人であるが、假りに三十年を一代として、西曆紀元を一千九百年として計算すれば、十代で一千二十四人、十五代で三萬二千五百二十人、二十代で百四萬の親がある。即ち人間の代になつて、大略五十代であるが、この時代からの、私の祖先の数を調べて見ると、實に十八兆百五十億の親がある。爾らば全世界の人類の親の数は、實に莫大なものとなる譯であるといふ、興味深き調査

をせられた學者がある。

かゝる見易き事實に徴しても、單に兩親にかぎつて孝道を云云するは、誠に偏固の至りであると申さねばならない。又直接自分のこれまで生長して来たことを考へても、單に兩親の力のみで、今日あるを得られたわけのもので無く、更に兩親に就て考ふるも、其の住宅、その衣服、其の食糧、その職業、かぞへ来れば一切萬事、社會全人類の、共存共營によらないものは無い。即ち生々世々の全人類が、互に父となり母となりて、育成し長養せられたことであるから全人類に對して、感謝奉仕の至誠をいたす、これが眞の孝道と申すべきものでなければならぬ。

次に念佛については「わがちからにて、はげむ善にてもさふらははこそ、念

佛を廻向して、父母をもたすけさふらはめ」と仰せらるゝ。念佛とは何か、南無阿彌陀佛である。この南無阿彌陀佛は、阿彌陀如來の名號である。即ち因位の萬行、果地の萬德を、この六字の名號にて成就せられたものである。若しもこの南無阿彌陀佛が吾等の力で、成就したものであるならば、これを廻向してあの世の父母をも助けたいとの望みも起されやうが、阿彌陀如來の願力成就の南無阿彌陀佛を、吾物がほに振舞うて、これを廻向して、亡き父母の冥福を祈るなどといふことは、誠に以て、畏れ多い、僭越の沙汰と申さねばならぬ。そもく救ひたまふは如來で、吾等は救はるゝものであることを忘れてはならぬ。亡き父母も、今の吾等兄弟姉妹も、全人類から生きとし生ける三世十方の一切有情、一として如來の救ひを蒙らぬものは無いのである。然るを凡夫一旦の迷

情から、自力廻向の心を起して、知らず識らず救済者の地位に立ち、人を助け救はんなどとは、誇大とやいはん、妄想とやいはん、畏れつゝしまねばならないことである。

かくの如く「一切の有情は、みなもて世々生々に父母兄弟」なることを忘れたゞ兩親にかぎつて孝養を云云するは、固陋なる僻見であり、更に願力成就の南無阿彌陀佛を、吾物顔に振舞ふて、追薦廻向に供せんとするは、畏れ多い僭上の沙汰である。そもく救済者は如來であり、吾等はすべて如來の救済にあづかる者である。されば人に廻向し、人を救はんと志す前に、先づ自分が如來の御助けにあづからねばならぬ。それゆゑに今聖人は「たゞ自力をすてゝ、いそぎさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも

五章の要目

神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり」と仰せられた。かゝる他力信仰の高唱に接しては、胸底深く、偉大なる響きを覺ふることである。更に此の一章を(一)孝養の對象、(二)念佛の不行、(三)眞の孝養の三段に分ちて、咀嚼してみたいと思ふ。

一、孝養の對象

「孝養の對象」の父母、即ち兩親であることは、自明の事實である。然るに、それを問題にして、彼れ是れ申すといふことは、甚だ奇を好み、辯を弄するの嫌ひが無いでもない。けれども、常に兩親の事を、思索の俎上に載せて、父はかゝる人である、母はかくの如き人である。此の父と母とは、如何して自分

孝養の對象

忠と孝と

を産みしか。如何なる状態のもとに、自分を育成したりしか、而して自分は、此の父と母とに對して、如何に考へ、如何に事ふべきかなど、考慮をめぐらすことが、果して所謂孝養の道にかなへる事か、否か。頗る疑問であるといはねばならぬ。かくて「孝養の對象」といふことが、正しく問題となるのである。往時、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずと、泣いて死を選んだ人がある。聞く者、斷腸の思ひを起さないものは無い。かくの如きは、軽々しく批議すべき事ではないが、忠と孝とは、しかく矛盾するもので無く、所謂忠臣は孝子の門より出づるが實際でなければならぬ。然るを何故に恰も岐路に立ちたる如く、忠と孝との二道に就て、其の去就に迷惑したかと考ふるに、其の根本は、父母を兩親といふ、生父生母にかぎつて考へた事に無

くてはならぬ。忠といふも亦然りて、君の馬前に討死といふやうな事を、無上の忠節と心得るならば、それは孝を肉親にかざると同じやうな、偏僻固陋の迷妄といはねばならぬ。眞の忠孝は、君といひ、親といふやうに、かざられたる人に盡すの道では無く、廣く國の爲め、世の爲め、人の爲めに盡すの道である。即ち、廣く國の爲め、世の爲め、人の爲めに盡すことが、やがて亦かざられたる君の爲め、親の爲めにも、忠となり、孝となる所以の道であるのである。

むかし宋の代に岳飛といふ忠臣があつた。宋一たび南渡して、其の勢また振はず、金軍外に迫り、和戦の議内に決せず、國歩頗る艱難に陥つた。この時に當り、岳飛は身を以て國に許し、寡兵を提げて強敵にあたり、大いに金軍を破つて、懸軍長驅、將に汴京を復せんす勢であつたが、和議者の秦檜等の爲

めに誣ひられて囚に就き、汴京復せず、中原また敵手に委して了つた。岳飛囚はるゝや、肉袒して其の背を示し、亦二心なきを誓ふた。就いて見れば『盡忠報國』の四大字を醵してあつたといふ。時に年三十九であつた。自分は去春江南に遊びて、杭州西湖のほとりに、親しく岳飛の墳墓を訪ふた。墓門を入れば左右に岳飛の墳墓と對して、秦檜、王氏等の、面縛して跪ける銅像が、鐵柵内に立てられてある。古往今來、此に來る者、皆これに尿せざるは無い。蓋し忠を悼み、佞を憎むの情に出づるものである。墳墓に隣接して、輪奐雄大を極めた『岳王廟』が、新に改築せられて居る。その彩飾頗る濃厚で、甚だ俗惡極まるものではあるが、遠近の老若門前市をなすの殷賑で、其の廟頭に跪拜する敬虔の態度には、行客をして坐ろに涙を催はさしむるものがある。由來支那は其

の境域龍大に過ぎ「大男總身に智慧が廻りかね」と言つたやうに、中央政府の威令普及せず、随つて支那の國民に、國家的の觀念は認められないといはれて居るのに、往時南宋に岳飛の如き志士の出でしが既に奇跡であり、目下南北の紛糾、何時果つべしとも覺えざるの時「岳王廟」に誠意をぬきんする男女、踵を接して到るといふことは、更に以て不可思議の現象である。去つて南京の秦淮河畔に行けば、前後左右長屋式に整列せる「貢院」の殘骸に、當年科擧の盛時を偲ばしむるのみで、其の中心たる「孔子廟」の現状は、寂寥殆んど空谷の如く、廟前河畔に繫留せる畫舫の繁榮と對照して、轉た今昔の感に堪へざるものがある。更に轉じて「明の孝陵」に到れば、石人空しく原頭に佇立して、荒廢殆んど觀るに忍びざる慘狀である。これを彼の「岳王廟」の、隆盛年と共に加

はるものあるに對比して、支那國民性の、いよく出で、いよく奇なるに驚かざるを得ない。蓋し岳飛の「盡忠報國」たるや、君といふかぎり、られたる人を對象とせず、國の爲めといふ廣き道に盡したものであつたから、更に廣く且つ長へに、世の人々の心の中に、生き行くものであることを否むことは出来ぬ。又孝子節婦と並び稱せられて居るやうに、妻として夫に貞節を盡すことは、忠孝に劣らぬ美德となつて居る。この貞節といふことも、貞女は二夫を並べずといはれてあるやうに、その對象の、一人の夫にあることは、争ふべからざる自明の事のやうである。勿論多數の男子に身心を許すといふことは、人道の埒外で、全く問題とはならないのであるが、さりとて、貞節の對象を、一人の男子にかぎるといふことは、前の忠孝の場合と同じく、偏僻固陋の考へで、婦人

自ら小にするの迷妄といはねばならぬ。元來貞節とは、又貞操ともいつて、其の對象を外に求むべきで無く、内自ら堅固に操守するところあるべきをいふのである。同じく杭州西湖、放鶴亭の下方に『明女主廣陵馮小青之墓』といふがある。小青は、武林馮生の女、年十六にして、生氏に歸したるが、生氏の妻の妬むところとなり、孤山に幽閉せられ、悶々の情を、書畫に晴らして居つたが、病を得、妙齡十八、遂に血を吐いて死んだのである。これに就て、次の如き、可憐の哀話が傳はつて居る。

その昔、武林に馮生といふ一住民が居た。それに元々といふ愛らしい一人の娘があつたが、妙齡十六にして、生氏の妾となつた。ところが、生氏の妻といふ

×

×

×

×

のが、非常の妬き持ち屋で、元々があまり美しいものだから、何かにつけて辛く當り、仕舞には、とう／＼元々を孤山の別室に移し、そして自分の命令が無ければ、郎君の家に行くとも出来なければ、又郎君も此の室に入ることを禁ずといふ、戒嚴令を下してしまつた。生來月のやうな美しい元々は、此の幽閉に遇うて以來、日夜憂愁の雲に閉されたので、彼女の眉間、一抹の憂ひ漂ひ、玲瓏たる美人は、やがて凄艶の美人となり、その美が、一層深酷化されて來た。初恋を失うた若い女の寂しい心と、本妻の無法な仕打ちに對する優しい怨みとは元々をして、毎夜空間に涙を濡らさしめた。

此の物狂はしい日夜を、真心から慰めて呉れる楊夫人といふのが居た。元々と俱に孤山に來て居た人である。彼女が本を讀みたさに、生氏へ貸與を申し出

ても許されぬところから、よく此の楊夫人の許から、色々の本を借りて讀んでは、僅に悶々の情を晴らして居た。一日楊夫人は、元々に向ひ、あなたもこんな有様では、一生埋れ木となつて、遂に花咲くこともないから、いつそ此處を逃げ出してはどうです。自分は女侠ではないが、及ばすながら、此の苦難からあなたを救うてあげませう、と言つたが。元々は頭を横に振り、僅かに笑ひを漏らして、妾は夢に花一枝を手折つたが、花びらが、風に随つて片々として散り水に落ちた。妾は此の儘、此の花の如く散り失せても、それは妾と生氏と、縁が薄いのだと諦める。折角の御厚意なれど、已に決心して居るからと答へ、兩人相見て、暫らく泣いて動かなかつた。

その後、楊夫人も、夫君と俱に孤山を去つたので、元々は全く孤獨の寂寥に

堪へ兼ね、日々に窶れゆく自分の姿を、水鏡に寫して見れば、今は泣くに涙も涸れてしまひ、終に病を得て床に就く身となつた。醫者が来て、藥をすゝむるけれど、元々は、自分は人生を願はないと言つて、どうしても服しない。かくて病は募るばかりであつた。元々は慄へる手先で、楊夫人に一書を認め送つたが、書未だ届かざるに、元々は危篤に陥つた。もう逆も助からないと観念した彼女は、一日一畫家を呼び、淡粧してその姿を繪に寫さしめ、それを榻前に懸け自ら梨汁をつくつて之れに奠し、その前に額いて「小青小青、薄命なりし君を弔ふ」と言ひつゝ、几を撫して慟哭し、遂に十八歳を名残として、果敢なく散つてしまつた。役人が、その情操を憐れみ、此に墓を造つた。小青といふのは、元々の字である。時は明の萬歴年間のことだといふことである。

自分じぶんの繪姿えいそに供物くぶつを奠たてまつし、その前まへに額ひたひきて「薄命はくめいなりし君きみを弔なぐさふ」とは、何なんといふいぢらしさであらう。その情操じやうさうの麗うるはしさ、哀あはれといはんよりも、寧ろなご神々かみかみしきものがある。道みちは坦々たんたんとして長安ちやんあんに通つうず、然しかるを自みづから狭せまく、小ちひさく、局執きよくしゆして、君きみといひ、親おやといひ、夫つまといふが如ごとき、一人ひとりにかぎりて事つかふるは、真まことに忠ちゆうたり、孝かうたり、貞ていたる所以ゆゑの道みちでは無ない。親鸞しんらんは父母ふぼの孝養かうやうのためとて一遍ぺんにても、念佛ねんぶつまふしたること、いまださふらはず、そのゆへは、一切いっさいの有あ情じやうは、みなもて、世々せせ生々しやうしやうの父母兄弟ふぼあになり……。かくて廣ひろく且かつつ長ながへに、吾わが前まへに展開てんかいせられたる大道だうだうに向むかつて進すすめば、それがやがて、かぎられたる君きみにも親おやにも、夫つまにも、忠ちゆうたり、孝かうたり、貞ていたる所以ゆゑの道みちであるのである。

二、念佛の大行

わがちからにて、はげむ善ぜんにてもさふらははこそ、念佛ねんぶつを廻向えきやうして父母ふぼをもたすけさふらはめ……。と仰おほせらるゝ。いふこゝろは、若もしも此こゝの南無阿彌陀なむあみだぶつ佛ぶつが吾等われらの力で成就じやうじゆしたものであるならば、これを稱なへて、稱なへた功徳くどくを、あの世よの父母ふぼにも廻向えきやうしたいと志こゝろすことも出来できようが、この南無阿彌陀佛なむあみだぶつには阿彌陀如來あみだにょらいが、因位いんゐ法藏比丘ほふざうひくの昔むかし、清淨眞實しやうじやうしんじつのお心こゝろで、難作能作なんさくのうさせられた萬まん行ぎやうと、その成就じやうじゆしたる果地くわぢの萬徳まんてくとが、缺かくるところなく具足ぐそくせられてある即すなはち全く佛因佛果ぶつゐんぶつぐわの名號なごうであるのに、それを吾物顔わがものがほに心得こゝろえて、追薦廻向ついでんえきやうの用ように供まもするなごゝいふことは、誠まことに以もつて畏おそれ多い、僭上せんじやうの沙汰さたであると仰おほせらるゝ

念佛は我
力にて勵
む善なら
ず

のである。

がしかし、念佛とは、くはしくは稱念佛名と申して、佛名を稱念すること、吾等の口業で、佛名即ち南無阿彌陀佛を稱ふることである。凡そ努力には必ず報酬の伴ふものであり、従つてまた必ず報酬を豫期して努力するが、さもない凡夫の常習である。今念佛は吾等が努力して彼の佛名を稱ふることであるから稱へた努力に、執拗なる期待がつきまとうて、自己の將來より、延いては他の爲に追薦廻向の意の起ること、凡夫のつねとして、蓋し自然の傾向と申さねばならないやうである。けれども、吾等の努力のみで、吾等の口が、果して南無阿彌陀佛と動くであらうか。人の四肢五官、總じて肉體は機械である。機械のひとりで動くもので無いことは、いふまでもない。若しも機械がひとりで動

念佛する
原動力

他力催足
の不行

くやうなことがあると、これほど危険なものはない。何時ぞや東京驛の汽關車が獨り動いて人家に突入し、大騒動をやつたやうに、何等成果の得られないのみで無く、たゞ破壊あるばかりである。人の四肢五官の單獨に動くといふことは夢遊病者か、泥酔者、いはゆる失神者に於てのみあり得ることであるが、それでも、朦朧たる多少の意識は伴うて居る。況んや健全なる意識の所有者にして、無意識に、又は己れの欲せざることに、四肢五官を動かすといふことの、有り得るものでない、必ず自己衷心の向ふところに随つて動くものである。

果して然らば、吾等の口は、どうして南無阿彌陀佛と動くやうになつたであらうか。それは、吾等の心の導くところであらねばならぬ。「あれば鳴る、なければならぬ鈴の玉、むねに六字があればこそ鳴れ」といはれたやうに、南無阿

彌陀佛といふ心の導きに依らなければ、口の南無阿彌陀佛と動く筈がない。けれども、吾等本來南無阿彌陀佛といふ心の持主ならざるに、口の南無阿彌陀佛と動くといふことは、果してどういふわけであらうか。前章にも引きし『安心決定鈔』に

念佛三昧に於て、信心決定せん人は、身も南無阿彌陀佛、心も南無阿彌陀佛なりと思ふべきなり。人の身をば、地水火風の四大寄り合ひて成す、小乘には極微の所成といへり。身を極微に摧きて見るとも、報佛の功德の染まぬ所はあるべからず。されば機法一體の身も南無阿彌陀佛なり。

心は煩惱隨煩惱等具足せり、刹那々に生滅す。心を刹那に千割りて見るとも、彌陀の願行の遍せぬ所なければ、機法一體にして心も南無阿彌陀佛なり。

り。

吾等が迷倒の心には、法界身の佛の功德みちく給へるが故に、また機法一體にして南無阿彌陀佛なり。

といはれてあるやうに、吾等本來の心に、南無阿彌陀佛といふ心は無いが、吾等の心、吾等の身體、吾等のすべてが、南無阿彌陀佛に抱擁せられて居るのである。それゆゑに、吾等の努力で、口が南無阿彌陀佛と動くのでは無く、葉は自から太陽に向つて擴がり、枝は自然に太陽に向つて繁るやうに、吾等の心、無始已來南無阿彌陀佛に育成せられ、自然に南無阿彌陀佛に向ふやうになり、四肢五官も、この心に導かれて、禮讚の誠をぬきんづるやうになる。これを他力催促の大行と申すのである。然るを、南無阿彌陀佛と稱ふる口業の努力に執着

一青年の告白

して、自己の將來より、延いては他の爲に追薦廻向の具に供せんとするは、全く以て其の由來するところの本源を忘れたる、痴呆の沙汰と申さねばならぬ。更にこれを現代信仰界の事實に就て考へて見るに、衷心には信仰の確立を庶幾して居りながら、口に南無阿彌陀佛を稱ふるといふやうなことは、つとめて之を忌避するといふが、現代の信仰界、特に青年求道者の常態であるやうである。自分が大連で、月に一再は必ず感談を交はす一青年が、満鐵社員の中に在る。世故を氣にせぬ、脱俗的などころのある、誠にいゝ人である。或時の感談に、自分は別院の佛前に參拜しても、他の御同行達のやうに、口に南無阿彌陀佛と稱ふることをしない、心に敬意を忘れざれば、稱へなくともよい、稱ふる必要は無いと思つて居るのですが、やがて講話が始まり、會心のところにいた

るといふと、覺えず南無阿彌陀佛と稱へてしまふ。又自分の書齋で、信仰關係の書物を繙いて居る時でも、常に黙讀して居るのであるが、その黙讀の間にも法悦を覺ゆるといふと、自然に聲に出して南無阿彌陀佛と稱ふることがある。他力催促の太行といふことを、折々聞きました、成程他力の催促ですなあ云々。まことに難有なことだと思ふたことである。稱ふることに努力するでは無く稱へないことに努力して居るのに、法悦の一境に逢着すれば、自然に南無阿彌陀佛を口ずさむといふことは、これぞ南無阿彌陀佛に身も心も抱擁せられて居る幸慶の顯現せるもので、隨喜のいたり堪へない次第である。他力催促の太行、これが即ち報恩の行である。報恩の行は、爲さねばならぬといふ義務的の行爲では無く、爲さずには居れない、感激の行爲である。この

報恩の行

行を、如來の本願に、乃至十念と誓はれてある。親鸞聖人の云く「尊號眞像銘文」

乃至十念とまふすは、如來のちかひの名號をとなへんことを、すゝめたまふに、遍數のさだまりなきほどをあらはし、時節をさだめざることを、衆生にしらせんと、おぼしめして、乃至のみことを、十念のみなにそへて、ちかひたまへるなり。如來より、御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をとりて、臨終の稱念をまつべからず、たゞ如來の至心信樂を、ふかくたのむべしこの眞實信心をえんとき、攝取不捨の心光にいりぬれば、正定聚のくらいにさだまるとみえたり。

十念といへば、必ず十遍となふることゝ迷執してはならないから、乃至のみことを、十念の御名にそへて、遍數のさだまりなく、時節をさだめざることを、おしめし下された。更に此の本願成就の文には、乃至一念と説かれてある。親鸞聖人の云く「一念多念證文」

乃至は、おほきをも、すくなきをも、ひさしきをも、ちかきをも、さきをものちをも、みなかねおさむることばなり。一念といふは、信心をうるときのきはまりを、あらはすことばなり」と仰せらるゝ。即ち如來の本願力を信する、信一念

の極促の時、攝取不捨の心光に入り、正定聚のくらゐにさだまりぬれば、業事全く成就して、更に缺くところは無い。それゆゑに乃至一念、即得往生、住不退轉と説かれた。これが親鸞聖人の「涅槃真因、唯以信心」と極唱せらるゝ根本起調である。

不幸に惱める人々を、援助し世話する仁慈の人も稀にはある。斯ふいふ人の意では、彼の勤勞に従事させう、此の仕事を働かさうと、將來の服務を豫期して世話するわけでは無い、たゞ悲惨の境遇、看過するに忍びずして、援護するのであるが、御蔭で浮ぶことの出来た身に取りては、よしんば火水の中をくりても、勤務に服して奉仕せずには居られないものである。大悲光中に攝取して、一子の如く憐念したまふ如來の御意には、つゆ聊かも、吾等に起行作業を

要求し給ふ思召はあらせられない、これが乃至のみことを、十念の御名にそへて示したまへる誓意である。けれども、かゝる大悲悲に抱擁せられたる、身の幸慶に感激しては、御名を稱へて報恩の經營に、粉骨碎身の奉仕を爲すには居れない。それゆゑに親鸞聖人は「如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし師主知識の恩徳も、骨をくだきても謝すべし」と感奮せられたものである。

若し夫れ、爲せねばならぬと、自力の心より奮勵努力するのでは、必ず疲勞を覺え倦怠を來すこと、蓋し止むを得ない次第である。それ故に、佛前にて木魚を叩き、晝夜不斷に念佛相續する教宗では、人々時間交代で稱へて居らるゝやうである。然るに、佛恩に感激のあまり、爲さずに居れない他力催促の不行では、處を佛前のみと定むるで無く、時を何時と限るで無く、人を誰れそれと

選ぶて無く、「男女貴賤ことごとく、彌陀の名號稱するに、行住坐臥もえらばれず、時處諸縁もさはりなし」と、仰せられてあるやうに、何日何時、誰れ人が何處で、如何なる場合でも、稱へずには居られない。さればにや、自力稱名の教宗の人々には、日常行住坐臥の間に御名を稱ふるといふことが無いやうであるが、親鸞聖人の御同朋は、悲しきにも、喜ばしきにも、善きにも、悪しきにも、凶事にも、慶事にも、食堂でも、浴室でも、労働の時も、休養の時も、所謂時處諸縁をえらばず、御名を口すさみて居る。

稱へねばならぬといふ教への下には、稱ふる聲が稀であつて、稱へずともよいといふ慈教の下に、稱ふる聲が相續して絶えない。他力催促の念佛は、誠にありがたい大行である。

父母は
生父母
にかぎる
にあらす

三、眞の孝養

「一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり、いつれもく、この順次に、佛になりてたすけさふらふべきなり」と仰せられ、「たゞ自力をすて、いそぎさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり」と仰せられた。前に申したやうに孝養の對象を、單に生父母の兩親にかぎるといふことは、甚だ偏僻であり、固陋でありて、親鸞聖人の仰せらるゝやうに、事實一切の有情が、皆ことごとく父母であり、兄弟であることを忘れてはならない。それと同じやうに、孝養の時期を、一代生存の間に限りて考ふることは、亦甚だしき迷執であり、妄想